東洋學報　第拾七卷第二號　昭和三年十月

論　說

聖武天皇宸翰雜集に見えたる隋大業主淨土詩に就いて

圓下大慧

一　はしがき
二　所謂隋大業主淨土詩の全文
三　五會法事讃と往生禮讃
四　彦琮の略傳及びその著述
五　隋の彦琮と唐の彦悰
六　淨土詩と煬帝と彦琮との關係
七　結　論

一　はしがき

自分は曾て正倉院の拜觀を許され、祕庫の中を敬觀するの光榮を得たことがある。そのとき親しく隋唐の文物、精緻巧妙を極めた珍什寶器、及び數百卷の古文書等の奇しくも儼存してゐるのに驚異と讃嘆とを以て暫めたものであつた。いまそのときの「正倉院御物棚別目錄」を繰つて見ると、北倉、階上、西棚の條に、

(153)　御書　三卷　（北第三號）　白葛の御書箱一合を具す

雜集　一卷

獻物帳に「白麻紙、紫檀軸、紫羅標、綺帶、右平城宮御宇後太上天皇御書」とあり。六朝隋唐の詩文一百四十餘章を鈔錄したまひしものにて、卷尾に「天平三年九月八日寫了」とあり。今古紫紙を以て標せり、帶闕く。(1)

とある。こゝに獻物帳とあるは云ふ迄もなく「東大寺獻物帳」(2)にして、後太上天皇とあるは聖武天皇を指したことは申す迄もない。先きに「御書三卷」とあるは、皇太后卽ち光明皇后の御筆になる「樂毅論」や「杜家立成」を合してのことである。かくて自分も聖武天皇宸翰雜集を拜觀したけれども、固よりその一斑を垣間見たに過ぎなく、その內容に至つては全く知る緣がなかつた。そしてその忠實正確な紹介の出現を渴仰してゐた。

ところがその後文學博士佐々木信綱氏が、前記宸翰を「南都祕极」(3)の名のもとに、他の寧樂朝

時代の稀覯文獻數種と共に、影印玻璃版に附してこれを複製となし、文學博士内藤虎次郎氏の漢文解説を添へて、これを世に送られた。内藤博士の解説は、和譯されて後に雜誌「支那學」[4]誌上に轉載され、題して「聖武天皇宸翰雜集」と云つてゐる。今春又再錄して「研幾小錄」中[5]に納められた。この複製によつて初めて吾々は、その宸翰に盛られた内容に就いて知ることを得たのである。この佐々木・内藤兩博士の學界への寄與に對して、吾々學徒は、多大の感謝を捧げねばならぬ。後段詳説しようとする卑見も、これによつて内容を知ることを得た結果に外ならないからである。

前にも言へる如く、この雜集は「東大寺獻物帳」に載つてゐるもので、聖武天皇の御登遐の後大練忌辰に當り、その御冥福を祈り奉らんが爲に、光明皇后が東大寺に獻納し給うたものである。前記「棚別目錄」には、唯「六朝隋唐の詩文一百四十餘章」とあるが、親しくこれを檢するに釋敎に關する詩文、特に西方淨土を謳歌せるものを、多く鈔錄し給へる點に注意しなければならぬと思ふ。

今日この雜集が、その卷首斷闕して完本でないのを惜しむことは、自分も決して人後に落ちぬが、その殘存せる部分すら一の奇蹟と思はなければならぬのであるから、これ以上の望蜀は勿體ないことである。

雜集載する所の詩文中、その作者の名の明かなるは王居士、隋大業主、眞觀法師、釋靈寶、周趙王、釋僧亮等の六人である。いまこゝに問題とするのは、その「隋大業主」に就いてである。篇

末玻璃版に見る如く、御筆は楷行の間をとれる書體で、毎行十八字詰毎首三行である。その字劃も唐末から宋へかけて整理される以前の所謂寫經風のもので、(9)その筆致頗る圓勁流麗、纖細のうちに剛遒あり、眞に王羲之(右軍)の眞髓を體得し給うたものであるやうに拜せられる。これは又別に我が國書學史の見地から見て好箇の研究史料たること論を俟たない。

宸翰雜集に見えたる「隋大業主淨土詩」に就いて卑見を述ぶるに先立ち、論を進むる便宜上內藤博士の解題を紹介しておく必要がある。

隋大業主とは卽ち煬帝なり。雜集中載する所は皆淨土詩と題せる者なり。隋書經籍志には煬帝集五十五卷を著錄せるが、舊唐書經籍志には卷數を三十卷に作り、新唐書藝文志には五十卷に作り、日本見在書目には二十八卷に作り、今傳ふる所は張溥の漢魏六朝百三名家集に載せたるには卷數なく、嚴氏(可均)の全隋文には文四卷を輯錄し、馮氏(惟訥)の詩記には詩三十六首附錄十數首を載せたるが、張氏と嚴馮二氏とは互に出入あり。馮氏の詩記中、釋敎に關せる者は皆廣弘明集より採りたる者のみにて、淨土詩といふものなし。隋の煬帝は荒淫を以て國を喪ひし君なれども、其の晉王たりし頃は、聰明を以て聞え、務めて矯飾して親を悅ばし、又佛敎を信じ、天台の智者大師に歸依し、現存の書牘は槪ね大師と往復せるものなる程なれば、隋書に詞無浮蕩と評せるも誤言にあらず、淨土詩も皆矜莊なる辭氣にて、其の佛敎信仰は、矯飾の結果にあらざる事を見るに足れり。と。自分はいつもながら博士の該博豐饒な群書の活用と、烱鋭な史眼と周到な推論考證

には、滿腔の尊敬を拂ふに吝かなものではない。いま隋大業主の煬帝なることには何の異存もない。がこの「淨土詩」なるものに就いては、一言說明しておく要がある。

淨土は穢土に對しての呼稱であることは、今更說明する要はない。淨刹、淨國、嚴淨國、淨界、嚴界等の字面で詩中に見ゆるが、皆清淨なる佛國土の意で、この世の如く穢惡雜染の相あるなく、微妙嚴淨の莊嚴國土に充滿し、廣大甚深の法樂長へに享受せらるゝの土である。素より淨土は西方極樂淨土のみではなく、或は十方淨土、藥師の東方淨瑠璃世界、彌勒の兜率淨土、釋迦の無勝莊嚴國いづれも皆淨土であるが、西方極樂世界に關する經論說疏の最も多い所から、古來主として願生の標的となり、彌陀の信仰欣慕と共に、淨土とし云へば殆ど直ちに西方極樂淨土を指すやうになつたのである。こゝにいふ「淨土詩」も亦他の淨土にあらずして、西方阿彌陀佛國を讃嘆せるものであることは、一讀する者の直ちに了解するところであらう。この淨土詩が果して煬帝の作になつたものであらうか、後に詳述する如く煬帝の佛敎信仰、天台智者大師との關係、共に眞正の事實ではあるが、この詩の煬帝の作たるを證する積極的の證左とするには、なほ疑問が存することだけを、こゝでは云ふにとどめる。然らば何人の手になつたものであらうか。又若し他に作者があつたとすれば、そは如何なる人であり、その人と煬帝との關係の有無は如何、又如何にして誤つて煬帝の作となつて、我が國に傳はつたであらうか、更に又究むれば、何時頃誰人によつて、如何にして我が國に將來されたであらうか。かうした問題は次ぎ次ぎに起つて來よう。若し幸にこれ等の事柄が鮮明され

得るとせば、我が國上代の人々、少くとも宮廷・貴族の間に何時頃より淨土教の思想が植付けられたかを探り得る鍵鑰ともなり、又日本淨土教史上に、一の重大なる劃期をなすものとも思はれるから、以下少しく私見を述べて博雅の叱正を願ひ度いと思ふ。

二　所謂隋大業主淨土詩の全文

いま本論に入るに當つて問題のテキスト全文を紹介する必要があらう。後に繰返して對比する便宜上、各詩首に番號を付し、詩尾にその韻字を併記した。下段に示せる數字及び文字に就いては第三節に詳說する所あるであらう。

隋大業主淨土詩

1　法藏因彌遠　極樂果還深　異珍參作地　衆寶間爲林
　　花開希有色　波揚實相音　何當蒙授手　一遂往生心　侵韻　往生一　五會I

2　濁世難還入　淨土願逾深　金繩直界道　珠網縵垂林
　　見色皆眞色　聞音悉法音　莫謂西方遠　唯須十念心　侵韻　往生二　五會II

3　道場一樹適　德水八池深　往々分渠溜　處々別行林
　　眞珠變鳥色　妙法滿風音　自怜非上品　徒羨發誠心　侵韻

4

也○ 聞○ 嚴淨國
林宣上品法 邁合下生人 剩○ 起至誠因 觀日心初定 寄○ 言同志友 想水念逾眞 從余洗客塵

眞韻 五會 III

5

白○ 豪○ 山○ 乍○ 轉○
業深誠○易往 寶手印恒分 因淺實難聞 地水俱爲鏡 必望除疑惑 香花○同作雲 超然獨不群

文韻 往生四

6

放光○周遠刹
尋樹流香水 分化滿遙空 吹樂起淸風 花臺三品異 在玆心若淨 人天一類同 誰見有西東

東韻 五會 IV

7

廻向漸爲功
開花○重○布○水 西○路○稍○然○通○ 覆網細分空 寶憧承厚地 願生何意切 天香入遠風 只○爲樂無窮

東韻 往生六 五會 V

8

十劫道先成
鳥本珠中出 嚴界引群情○ 人唯花○上生 金砂徹水照 敢請西方聖 玉葉滿枝明 早晚定想○迎

庚韻 往生八 五會 VI

9

淨刹○本難○儔○
樹貪○香氣動 無數化城樓 水帶法聲流 四面垂鈴帀○ 未嘗○聞苦事 六反○散花○周 誰復辨春秋

尤韻 五會 XI

10
欲選當生處　西方最可歸　間樹開重閣　滿道布仙衣
香飯隨心至　寶殿逐身飛　有因皆可入　只自往人稀

微韻　往生七　五會　VII

11
未知何處國　不是法王家　偏求有緣地　冀得早無耶
八功如意水　七寶自然花　於彼心能繫　當必住非賒

麻韻　往生九

12
淨土無衰變　一立古今然　光臺百寶合　音樂八風宣
池多說法鳥　空滿散花天　已生得不退　隨意晚開蓮

先韻　往生一〇　五會　VIII

13
已成窮理聖　眞有遍空威　在西時現小　俱是暫隨機
葉珠相映飾　沙水共澄暉　欲得無生早　彼土必須依

微韻　往生三　五會　IX

14
心帶眞慈滿　光含法界圓　「遍土花分映　列樹蓋重懸
聞香足是食　見色本爲禪　生卽無餘想　誰云非自然」

先韻　往生五

15
千輪明足下　五道現光中　非引恒無絕　人歸亦未窮
口宣猶在定　心靜更飛通　聞名皆願往　日發幾花叢

東韻　往生一九

16

慧力標無上　身光被○有緣　動搖諸寶國　侍○坐○一金蓮
鳥群非實鳥　天類豈眞天　須知求妙樂　會是戒香全

先韻　往生二〇

17

遠壽如來量　遙音大士觀　「無緣能攝物」[14]　有想定非難
花隨本心變　宮移身自安　悕聞出世鏡　須共八禪看」

寒韻　往生五

18

恒明四海色　高貯一瓶光　「蓮開人獨處[24]　波生法自揚」
珠瓔和日月　風樹合宮商　儻如今所願　何訣得眞常

陽韻　往生一一

19

光舒救毗舍　空立引韋提　天來香蓋○棒　人去寶衣賣○
六時聞鳥合　四寸踐花○低○　相看無不正　豈復有長迷

齊韻　往生一二

20

勢至威光遠　觀音悲意濃　大小全相類　左右共成雙
花飛日々雨　珠懸處々憧　自嗟深有鄣　所念未能從

冬韻

21

印手從來異　分身隨類同　心至慈光及　人盛寶池充
見樹成三忍　聞波得五通　若解眞嚴淨　應觀土亦空

東韻

22
欲興三昧道　止觀一經開　心中緣相入　掌裏見花來
天樂非因鼓　法服不須裁　莫言恆彼住　有力念當廻　灰韻

23
普爲弘三福　咸令滅五燒　發心功已逮　繫念罪便銷
烏化珠光轉　風好樂聲調　俱忻行道易　寧愁聖果遙　蕭韻　往生一三

24
座花非一像　映地乃千光　「鍾聲聞舊習　寶樹鏡池方」
無灾由處靜　不退爲明良　問彼前生輩　超斯幾劫長　陽韻　往生一一

25
聖取明門入　天衣業地居　自覺乘通易　卽驗受身虛
枝陰交異影　光體一尋餘　但能逾火界　足得在金渠　魚韻

26
樹非生死葉　池無愛見波　火來念聲少　想成正觀多
蓮中胎化親　音內苦空和　五門能早逮　三界豈還過　歌韻

27
珠色仍爲水　金光卽是臺　以時花自散　隨願葉還開
遊池更出沒　飛空互往來　眞心如向彼　有善併須廻　灰韻　往生一四

28

六根常合道　三塗永絶名　念頃遊方遍　還時得忍成
地平無極廣　風長是處清　寄言有心輩　共出一危城

庚韻　往生一七

29

洗心甘露水　悅眼妙花雲　同生機易識　等壽量難分
樂多無廢道　聲遠不妨聞　如何玆五濁　安然火自焚

文韻　往生一五

30

臺裡天人見　光中侍者看　懸空四寶閣　臨迥七重欄
疑多邊地久　德少上生難　且莫論餘事　西望已心安

寒韻　往生一六　五會X

31

天親廻向〔日〕　龍樹往生年　樂次無爲後　心超有漏前
共沼花光雜　隔殿細陰連　欲敘莊嚴事　妙樂豈能宣

先韻

32

一土安恒勝　萬德壽偏存　聊興四句善　卽歎十方尊
微霑慧海滴　漸信向城因　廻與衆生共　先使出重昏

元韻

久しく擾亂を極めた六朝の天下も、隋の文帝出づるに及んで、政治的に統一されたことは周く人の知る所である。文帝又思想上の統一を完成せんと志し、大に佛法尊崇を奬勵した。

その開皇二十年十二月(西紀六〇〇年)に、發せる詔勅は何より雄辯にこれを説明してゐる、卽ち佛像、天尊像を毀つものは、何人と雖も大逆を以て論ぜしむ[8]といふのである。これが爲めか開皇の初から仁壽の末迄に、海内の諸寺三千七百九十二、僧尼の度せるもの二十三萬人、經論を寫すこと四十六藏一十三萬二千八十六卷、故經を修治せるもの三千八百五十三部、金銅・檀香・夾紵・牙石像等を造ること大小一十萬六千五百八十軀、故像を修治すること一百五十萬八千九百四十許軀、宮内常に刺繡の佛像及び畫像を造り、五色珠旛、五彩畫旛等に至つては、稱計することが出來ぬと、唐の沙門法琳が「辯正論」[9]の中に書いてゐる一事を以て見ても、如何に文帝一代の佛教の隆盛であつたかは察知出來ようと思ふ。その皇后も亦頗る佛教を信じ、殊に淨土教に信仰篤く、「瑞應傳」、「往生女倫傳」等[10]に載つてゐることを以て推しても、これまた並大抵の信者でなかつたことは明かである。

かうした仲に生れ、かうした雰圍氣に生長した晉王廣(煬帝)が、自ら佛教に熱心な信仰を有つやうになるのは、尤も自然の勢である。煬帝がその大業元年(西紀六〇五年)に、文帝の爲に造つた西禪定寺の規模の廣大、輪奐の美は實に素晴らしいものであつたことを法琳は詳記してゐる[11]。或は又清禪寺、日嚴寺、香臺寺、弘善寺等を建て、或は金銅釋迦坐像を造り、或は龍山の傍に高さ一百三十尺の彌陀坐像を作つてゐる。その他寫經、度僧尼、佛像の鑄刻等決して父帝に比して遜色ない。かくの如く外面上に表はれたる煬帝の佛教信仰からは、所謂淨土詩なるものが、彼より生れても差支ないやうに見える。

然らば次に內面的に思想上からこれを見ようとすると、なか〳〵困難である。尤も煬帝の內面生活を詳記した何物も今日傳はらないことは、かうした研究には甚だ不便であるが、彼の佛敎信仰の動機、淨土を欣求するの心事の、奈邊に存するかは頗る興味ある問題であらうと思ふ。父帝を弑し、兄弟を殺して皇位を簒奪した煬帝にとつては、懺悔の上の信仰であつたらうか、將た又、父兄の靈を畏怖しての堂塔伽藍の造營であつたであらうか、或は善人なほ往生す、況んや惡人をやとの考を以て、彌陀にすがつた結果であらうか。とにかく彼が淨土を欣求するの信仰を有つてゐたであらうとの推論を下しても、敢て過に墮することはあるまいと思ふ。然しこの影響を天台の智者に歸せむとすることには、首肯することが出來ない。

自分も天台の智者と煬帝との關係の淺からぬことは、內藤博士と共に認めるに何の躊躇もしない。煬帝と智者との往復書牘の一部分が現存してゐることも事實である。[12] けれども智者からは、かうした思想なり、信仰なりの影響は受け得ない。法華を中心とし、自解佛乘の上から諸法實相論を提げて、一心三觀の深旨を了悟した天台からは、淨土欣求の思想を稟受するとは思はれない。況や從來智者大師の著述と傳へられてゐた「觀無量壽佛經疏」及び「淨土十疑論」の二著は、共に天台智者の眞撰ではなく、天台の名を藉りて、他の者のなせる僞作であることが證せられてゐるに於いてをやである。[13]

又煬帝は學を好み、作るところの詩文亦甚だ多く、その詩氣格雄大、六朝の纖靡に似ず、所謂

唐風の先驅をなしてゐると言はれ、當時詩界の大宗薛道衡と、詩を競うたといふ話は、有名な事實である。いまこの淨土詩を見るに、常に對句を聯ねて技巧の妙をつくし、詞藻極めて雅麗、而もその間、矜莊なる辭氣を帶び、將に六朝風を脱して、新興の詩形に移らうとする過渡期の作風を示し、每首西方極樂淨土の讃歎を詠じてゐる。かうした方面からも、この詩は、煬帝の作と見ても差支なささうに見える。

ところがこれを煬帝の作と決する上に、一つの重大な支障がある。それはこの詩中に表はれた淨土の觀念、淨土の思想、淨土の有樣等を見るに、その作者は淨土敎所依の諸經論、卽ち少くとも「無量壽經」「觀無量壽經」「阿彌陀經」「往生淨土論」等を、充分に讀破し、而も縱橫無盡にこれを活用し得る人でなければならず、而もその上詩人としての天禀を多分に惠まれた人でなければならぬことである。約言すれば淨土敎學者にして、而も詩人を兼ねた人に、これを求むべきである。

吾々はかゝる資格を煬帝に求むることが出來るであらうか。頗る疑なきを得ない。煬帝の所行が唐、宋の史家によつて曲筆されて、ありしが儘の煬帝よりは、惡く宣傳されてゐることも、自分はこれを認める。それ故それ等を割引して考へ、今日傳へられてゐる煬帝よりは、よりよく認めるとしても、この所謂淨土詩を產み出す程の佛敎學の蘊蓄が煬帝にあつたとは、どうしても思はれない。

三　五會法事讃と往生禮讃偈

前節に掲げた所謂淨土詩なるものが、隋の煬帝の創作である爲には、煬帝は內三藏を窮め、外九流を洞じた佛敎學者で、兼ねて豐富な詩想を有つてゐなければならぬことになる。この點に尠なからず疑を懷いた自分は、若しかうした詩形なり、頌偈なりがありとすれば、それは勿論淨土禮讃か、阿彌陀佛を讃歎したものに相違ないと極めをつけて、藏經中に蓮門關係の文獻から、弘く讃文を漁つて見たのである。而してこゝに二つの有力な手懸を得た。

唐都長安章敬寺淨土院に於いて、法照の述作せる「五會法事讃」なるものが、卽ちその一つである。法照は唐の代宗の大曆中に活躍した淨土敎の大德で、懷感少康等と同じく、善導(後に述べる)の寂後大に淨業を修し、念佛弘通に盡した人である。殊に五會念佛を以て往生の極致とし、屢〻これを行つたので、五會國師の號を賜つたと言はれてゐる。[15]

この書は同じ法照の著に成れる「五會念佛廣法事儀讃」三卷なるものを、更に略述せるもので、正しくは「淨土五會念佛略法事儀讃」二卷といふのである。前者は惜しくも今佚して傳はらず、吾々は後者を見得るばかりである。その製作年代は、唐の代宗大曆元年から四年(西紀七六六—七六九)頃に成つたと信ずべき理由がある。といふのは法照自らがその序に於いて、五會念佛なる下に「梁漢沙門法照大曆元年夏四月中起自南岳彌陀臺般舟道場依無量壽經作」と割註してゐるし、[16]又章敬寺の創立に就いて宋の王溥は「唐會要」に於いて次ぎの如く記し

てゐる。[17]

章敬寺　通化門外、大厤二年七月十九日、內侍魚朝恩請以城東莊爲章敬皇后立爲寺、因拆哥舒翰宅及曲江百司看屋及觀風樓造焉。

と。章敬皇后とは肅宗の皇后吳[18]氏のことであつて、卽ちその追善の爲に建立されたものであることが分かる。今こゝに大曆二年とあるが、宋宋敏求の「長安志」には「大曆元年作章敬寺于長安之東門、總四千一百三十餘間、四十八院云云」と見えなほ「代宗實錄」を引いて附近の形勝を詳記してゐる。[19] 若し「長安志」を信ずるとすれば、大曆元年章敬寺の新築落成後、法照は南岳彌陀臺般舟道場より移つてこゝに入り、その完成を遂げたと見れば、初め南岳にあつて筆を起し、淨土院に入つて出來上つたと解すれば、法照の序文とも合すると思ふ。章敬寺淨土院は「長安志」の四十八院[20]中の一つであつたことは申す迄もない。然らば何故に「四年」と限定したかに就いては、法照の傳に次ぎのことがあるからである。

唐大曆二年、棲于衡州雲峰寺、……四年夏、照於衡州湖東寺、啓五會念佛道場云云。[21]

と。以上の史料にして信憑し得るものとせば、大曆元年夏四月に起筆し、後章敬寺に入り大體は出來上つてゐても、扨てこれを實際に行ずる迄には、幾度か推敲もし加筆もしたことであらう、さすれば四年初めて五會念佛會を開くとある以上、こゝに全く完璧となつたものと見て差支なからうと思ふ。よつて以て自分が先きに元年から四年迄の間と決定したのも、あながち無稽の臆斷ではあるまいと信ずる。

この書は序・正・流通の三部より成り、先づ教興の由來を示し、次に念佛の由致を顯はし、三に法事の緣由を說いてゐる、而してその法事は五會念佛に如くものなく、五會念佛には讃文の唱禮に如くものはないといふのがその大綱である。

この五會念佛を行ずるに當つて誦する讃文は「寶鳥讃」以下三十九の題目があり、[22]各題目下に又多きは數十首、少きも十數首の讃を擧げてゐる。いまこゝに關係を生ずるは、その第三十五題目「一切恭敬」の條である。それは次の十一讃より成つてゐる。左に宸翰淨土詩と對比する必要上列擧して見よう。

一切恭敬

至心歸命禮、西方阿彌陀佛

I 法藏因彌遠　極樂果還深　異珍參作地　衆寶間爲林　華開希有色
波揚實相音　何當蒙授手　一遂往生心　願共諸衆生　往生安樂國。（淨1往一）

至心歸命禮、西方阿彌陀佛

II 濁世難還入　淨土願逾深　金繩直界道　珠網縵垂林　見色皆眞色
聞音悉法音　莫爲西方遠　唯須十念心　願共諸衆生　往生安樂國。（淨2往二）

至心歸命禮、西方阿彌陀佛

III 夜間嚴淨國　垂起至誠因　觀日心初定　想水念逾眞　林宣上品法
蓮合下生人　既言同志友　從餘洗客塵　願共諸衆生　往生安樂國。（淨4）

至心歸命禮西方阿彌陀佛

IV
放言周遠剎　分化滿遙空　華臺三品異　人天一類同　尋樹流香水
吹樂超清風　在茲心若淨　誰見有西東　願共諸衆生　往生安樂國。（淨6）

至心歸命禮西方阿彌陀佛

V
廻向漸爲功　西方路稍通　寶幢承厚地　天香入遠風　開華往浮水
覆網細分空　願生何意切　正爲樂無窮　願共諸衆生　往生安樂國。（淨7　往六）

至心歸命禮西方阿彌陀佛

VI
十劫道先成　嚴界引群萌　金沙徹水照　玉葉滿枝明　鳥本珠中出
人唯華上生　敢請西方聖　早晚定相迎　願共諸衆生　往生安樂國。（淨8　往八）

至心歸命禮西方阿彌陀佛

VII
欲選當生處　西方最可歸　間樹開重閣　滿道布鮮衣　香飯隨心至
寶殿逐身飛　有緣皆得往　只自去人稀　願共諸衆生　往生安樂國。（淨10　往七）

至心歸命禮西方阿彌陀佛

VIII
淨國無衰變　一立古今然　光臺千寶合　音樂八風宣　池多說法鳥
空滿散華天　得生不畏退　隨意既開蓮　願共諸衆生　往生安樂國。（淨12　往十）

至心歸命禮西方阿彌陀佛

IX
已成窮理聖　眞有遍空威　在西時現小　小則暫隨機　葉珠相映飾

沙水共澄輝● 欲得無生果● 彼土必須依 願共諸衆生 往生安樂國。（淨13 往三）

至心歸命禮西方阿彌陀佛

x

臺裏天人現● 光中侍者看 懸空四寶閣 臨迥七重欄 疑多邊地久

德少上生難 且莫論餘願● 西望心已安 願共諸衆生 往生安樂國。（淨30 往十六）

至心歸命禮西方阿彌陀佛

xi

淨國●本無●憂● 無數化城樓 四面垂鈴逕● 六度●散華●周 樹介●香氣動

水帶法聲流 未曾●聞苦事 唯復辨春秋 願共諸衆生 往生安樂國。（淨9）

これによつて先きに掲げし宸翰淨土詩と一々對比するとき、前者に於いて白圈點を附せる字面が、後者に於いて黑圈點を附せるそれに變れる外、その排列の順序に於いて異るのみにして、各首全く符節を合するが如く、合致するを見るであらう。即ち表示すれば

五會法事讃……I (1)
II (2)
III (4)
IV (6)
V (7)
VI (8)
VII (10)
VIII (12)
IX (13)
X (30)
XI (9)
は

宸翰淨土詩……

と全く同一なることを知るであらう。唯だ後者にあつては、毎首頭必ず「至心歸命禮西方阿彌陀佛」、讃尾に「願共諸衆生、往生安樂國」を加へたるのみである。この兩者を偶然の暗合とするには、餘りに不思議と言はねばならぬ。否寧ろこの兩者の間には、必然的に親子關係の存在を認むべきであると思ふ。

法照はそのこれを擇取せる原典に就いては、一言も言つてゐないから、これからは全くその依據せる何物たるを知ることは出來ない。然るに幸にもいま一つこゝに法照の「五會法

事讃」と姉妹關係に立つて、而もより有力なるものがある。それは隋から初唐にかけて、支那佛敎史上特筆大書さるべき善導の著にかゝる「往生禮讃偈」一卷である。

善導は啻に支那淨土敎史上に重要な位置を占むる許りでなく、我が國の淨土敎に及ぼした影響の大なる點に於いて、忘れてならぬ人である。曇鸞道綽の流を汲み、所謂善導流の鼻祖として仰がれる專修念佛の主唱者である。淨土敎諸派の金科玉條ともいふべき五部九卷[23]の註疏は、實に彼の手に成つたものである。然るに彼の傳に至つては、古來頗る曖昧を極め、或は二人說、或は甚だしきは三人善導と呼ばるゝ人が、相前後して在世したとさへ言ふ學者すらある位である。[24] 自分もこれについて、少しく意見を藏するけれども、いまはそれを論ずるのが主意でないから、後日に讓ることゝする。

さて善導の著と言はるゝ五部九卷中、淨土門にて修すべき行法儀軌を明示せるものに「往生禮讃偈[25]」といふものがある。詳くは「勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國六時禮讃偈」といふ。常には略して「願往生禮讃偈」「往生禮讃」「六時禮讃」などと呼んでゐる。我が國淨土宗などに於いては、單に「禮讃」とし言へば、直ちにこれを指す程、重要な而も有名な聖典となつてゐる。

前にも一寸述べたやうに善導の傳記が明瞭でない許りでなく、その著述に就いては、傳中何等の記載もない、それ故五部九卷すら善導の作でないとする人さへある位である。然しそれは、善導と相前後して生存した他の人々の傳、又は著錄から推定して、善導の眞撰に少し

の疑も挾む餘地がない。

善導の弟子にあたる懷感が、その著「釋淨土群疑論」中に、「往生禮讃」の專雜二修の文を引用し[27]又少康が、洛陽白馬寺に善導の「西方化導文」を見た[27]と、贊寧の宋高僧傳中に見えてゐる、而してこの「西方化導文」とは、「往生禮讃」を指したものであることは、既に佛教史家の間の定說である。邊式がその著「往生西方略傳」の序に、善導六時禮讃一卷を作ると言つてゐるし[28]、唐の玄宗開元十八年(西紀七三〇年)崇福寺沙門智昇が一つ儀軌を集錄し、「集諸經禮懺儀」[29]二卷と名けてゐる。この上卷には諸佛を禮讃し、下卷には專ら阿彌陀佛を禮讃したものである。而してそれには、一言半句の修訂も加へず、善導の「往生禮讃」を轉錄してゐる。それゆゑ智昇は、上卷にあつては「大唐西崇福寺沙門智昇撰」と單記せるに對し、下卷に於いては「比丘善導集記」と並記して文責を明にしてゐる。智昇は又同年「開元釋敎錄」二十卷を撰し[30]、中にこの自著を收錄した、こゝに初めて「往生禮讃」が大藏の中に編入されたのである。後又德宗の貞元十年に、西明寺の翻經臨壇沙門圓照が、「大唐貞元續開元釋敎錄」三卷にこれを轉載した[31]。上に示した史料は、智昇と圓照の目錄を除いては全く個々別々の史料で、相互獨立し、決して因果關係のないものであれば、「往生禮讃」は正しく善導の眞撰と定めて差支ない。今日吾々が「往生禮讃」を見ることを得るは、全く智昇の藏經へ收錄して呉れたお蔭である。

次にこれが製作の年代及びその著作の場所であるが、これ亦彼の傳から直接に判定すべき何等の記載も殘つてゐない。けれども自分は次に述べる理由からかう斷定を下し得る

と思ふ。卽ち唐の太宗貞觀十年(西紀六三六)以後、高宗の總章元年(西紀六六八)迄の間、凡そこの三十二年間に、唐都長安の南神和原光明寺(今の終南山麓梗梓谷百塔寺)に於いて、彼の他の著述と共に書かれたものであらうと信ずる。

いま簡單にその理由を說明しよう。王昶の「金石萃編」に、善導の弟子懷惲の碑銘が收載されてゐる。[32]「大唐實際寺主懷惲奉勅贈隆闡大法師碑銘幷序」と題するものである。これを見るに、懷惲が西明寺に剃髮したのが高宗の總章元載、その後幾何もなく、當時盛烈天下に聞えてゐた「親證三昧大德善導闍梨」に從ひ、一たび妙旨を承くるや、「十有餘齡、祕偈眞乘親蒙付屬」とあり、高宗永隆二年(西紀六八一)闍梨の示寂するや、非常にその德を慕ひ、未だ師資をうけて充分ならざるに早くもその師を喪へるを悼み、その地に墳塋を造り、靈塔を建て、塔側に伽藍を構へ、寺內に十三級の大窣塔婆を建立して師德を偲んだ。「自惟薄祐師資、早喪、想遺烈而崩心、顧餘恩而雨面」と師弟の情を表してゐる。これ鳳城の南神和原の崇靈塔である。[33] 懷惲は則天武后の永昌元年(西紀六八九)勅によつて、これが主となつたと記してゐる。

懷惲が善導の弟子中でも傑出してゐたことは、屯田員外郎平昌の孟銑が、同じく善導の弟子懷感の著「釋淨土群疑論」の序に於いて、「復有懷惲法師、惲與感師幷爲導公神足」と書いてゐる[34]一事で明である。而して懷惲が總章元年に出家したとき、善導は已に大德となつてゐたことは、碑文に、「而未遠時、有親證三昧大德善導闍梨、慈樹森疎、悲花照灼、情袪□漏、擁藤井於蓮臺、叡化無涯、駈鐵圍於寶國、旣聞盛烈云云」とあり、祕偈眞乘を親しく付與されたといふを見れば、こ

のとき禮讃偈は既に出來てゐたに相違ない。

然らば何故に貞觀十年を限界としたかに就いて一言しよう。善導が道綽を晉陽(山西省太原)に尋ねて、淨敎に入門せる年次に就いては、道宣の「續高僧傳」[35]、少康・文諗共著の「瑞應刪傳」[36]共に記載がない。戒珠の「淨土往生傳」[37]王古の「新修往生傳」[38]王日休の「龍舒廣淨土文」[39]等は、皆たゞ「唐貞觀中」とのみあつてその幾年なるを辨ぜぬ、志磐の「佛祖統記」のみその何に依れるかは不明なれども、「貞觀十五年、善導法師至河西、見綽禪師九品道場講誦觀經」としてゐる。[40] 善導の傳記として最も古く且つ信ずるに足るべき道宣、少康の著に年次の記述なく、漸次年代を經るに從つて、「唐貞觀中」となり、最後に志磐に至つて「貞觀十五年」となれるは少しく疑問を抱かない譯にはゆかぬ。ところがこゝに志磐の掲げし年次の何等信ずるに足らざる證左となるものがある。

少康・文諗の「瑞應刪傳」によれば、道綽のもとにありて善導が修行中、華嚴の英法師と會し、一段の問答を交はしたことがある。卽ち、

「東都英法師講華嚴經四十遍、入綽禪師道場、遊三昧、而嘆曰、自恨多年空尋文疏、勞身心耳、何期念佛不可思議、禪師曰、經有誠言、佛豈妄語。」[41]

こゝに禪師とあるは言ふ迄もなく善導である。而して東都英法師とは、華嚴の道英にして、道宣の「續高僧傳」にその傳を載せてゐる。[42] これによれば、この問答のことも、道綽の門に參じたことも見えないけれども、曾て幷州(山西省太原、卽ち晉陽)に遊んだことを記してゐるか

ら恐らくその時のことであらう。然るに道英は、貞觀十年九月中に春秋七十七を以て示寂してゐる。若し、續高僧傳の記載にして誤なくば、道綽の許に於ける善導・道英の問答は、貞觀十年九月を下つてはならぬこととなる。若し假りに兩者の會見を、最極限として道英示寂の年としても、高宗の永隆二年六十九歳で圓寂した善導は、このとき二十四歳の修行盛りの青年沙門であつたことが分る。善導が道綽の室に參じたこと、行成つて後長安に念佛淨業を弘通したことは諸傳悉く一致する。志磐の「統記」は、「至京師擊發四部三十餘年」と記し、王日休の「淨土文」は、「卽爲衆說淨土法門、無暫時不爲利益、三十餘年不暫睡眠」[44]と書いて、その活動期間を示してゐる。こゝに於いて太宗貞觀十年(西紀六三六)より高宗總章元年(西紀六六八)迄、凡そこの三十二年間のどこかに「往生禮讃」の製作されたものと推斷を下した所以である。[43]

筆が大部横道にそれたが再び「往生禮讃」に立ち戻る、さてその內容を概觀するに、やはり三段に分れてゐる。第一序說に於いては、安心・起行・作業の三門を明し、第二正說に六時に禮拜懺悔するの儀式卽ち勤行法を示し、第三後序に廣く現當の兩益を明して、行者を勸發してゐる。いまこゝに必要なるはその第二正說であつて、六時に禮拜懺悔するの條である。こゝに六時とは日沒・初夜・中夜・後夜・晨朝及び日中これである。「往生禮讃偈一卷、沙門善導集記」と善導自身明に斷つてゐるやうに、所謂「集記」であつて、實際善導の作つたものは、前序・後序・日沒禮讃・初夜禮讃・日中禮讃とだけであつて、その他中夜禮讃は龍樹、後夜禮讃は天親、晨朝禮讃は彥琮の作れる偈を集めて載錄したものである。

六時禮讃偈、謹依大經及龍樹・天親・此土沙門等所造往生禮讃集在一處分作六時、
第一謹依大經釋迦佛勸禮讃阿彌陀佛十二光名、求願往生、一十九拜、當日沒時禮、
第二沙門善導謹依大經採集要文、以爲禮讃偈、二十四拜、當初夜時禮、
第三謹依龍樹菩薩願往生禮讃偈、一十六拜、當中夜時禮、
第四謹依天親菩薩願往生禮讃偈、二十拜、當後夜時禮、
第五謹依彥琮法師願往生禮讃偈、二十一拜、當旦起時禮、
第六沙門善導願往生禮讃偈、謹依十六觀作、二十拜、當日中時禮、

と善導は明記してゐる。善導の讃文採取所依の原典に就いては、更に後節述べる機會あれば、いまは言はない、只その順序を見るに、第一、二に釋迦說く所の大經により、第三龍樹、第四天親、第五彥琮等の著作より採集せるは、所謂佛菩薩・人師の次第に依つたもので、善導自らの分を以て結べる結構に巧妙なる文才の存するを見る。又日沒を以て行法の初めとした點にも、自ら典據の存するのである。卽ち「觀無量壽經」に於いて定善緣の正宗分日想觀[43]を十六觀中の最初としてあるに準じたものであることは明である。六時に分つて禮拜するの儀も既に早くから行はれてゐたことは言ふ迄もない。[46]

さてこゝに宸翰淨土詩と關係を生ずるは、この孰れであらうか。曰く第五晨朝偈卽ちこれである。然るに善導の引用にかゝる彥琮法師の「願往生禮讃偈」なるものは、自分の狹い檢覈では、今日いづれの釋敎目錄にも著錄されてゐるを見ない。

然し少くとも、唐の代宗大曆の初年頃迄は、存在してゐたことは、前段に述べた法照の「五會法事讃」が、これを採錄してゐることで明瞭である。

然らば善導謂ふ所の「六時禮讃晨朝偈」とはそも如何なるものであらうか、再び淨土詩と對比する要あるを以て、煩を厭はずこれを次に記さう。

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

一　法藏因彌遠　極樂果還深　異珍參作地　衆寶間爲林　華開希有色
波揚實相音　何當蒙授手　一遂往生心　願共諸衆生　往生安樂國。（淨1　五I）

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

二　濁世難還入　淨土願逾深　金繩直界道　珠網縵垂林　見色皆眞色
聞音悉法音　莫謂西方遠　唯須十念心　願共諸衆生　往生安樂國。（淨2　五II）

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

三　已成窮理聖　眞有遍空威　在西時現小　但是暫隨機　葉珠相映飾
砂水共澄輝　欲得無生果　彼土必須依　願共諸衆生　往生安樂國。（淨13　五IX）

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

四　五山毫獨朗　寶手印恒分　地水俱爲鏡　香華同作雲　業深成易往
因淺實難聞　必望除疑惑　超然獨不群　願共諸衆生　往生安樂國。（淨5）

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

五

心帶眞慈滿　光含法界團●　無緣能攝物　有相定非難
宮移身自安　悕聞出世境　須共入禪看　願共諸衆生　華隨本心變
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛　往生安樂國。（淨14 17）

六

廻向漸爲功　西●方●路●稍●通●　寶幢承厚地　天香入遠風
覆網細分空　願生何意切　正爲樂無窮　願共諸衆生　開華重布水
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛　往生安樂國。（淨7 五V）

七

欲選當生處　西方最可歸　間樹開重閣　滿道布鮮●衣
寶殿逐身飛　有緣●皆得●入　正●自往人希●　願共諸衆生　香飯隨心至
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛　往生安樂國。（淨10 五VII）

八

十劫道先成　嚴界引群萠●　金砂徹水照　玉葉滿枝明　鳥本珠中出
人唯華●上生　敢請西方聖　早晚定相●迎　願共諸衆生　往生安樂國。
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛　（淨8 五VI）

九

十●方●諸●佛●國　盡●是法王家　偏求有緣地　冀得早無邪●　八功如意水
七寶自然華●　於彼心能●係　當必往非賒　願共諸衆生　往生安樂國。
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛　（淨11）

十

淨國●無衰變　一立古今然　光臺千●寶合　音樂八風宣　池多說法鳥
空滿散華●天　得●生●不●畏●退　隨意●既●開蓮　願共諸衆生　往生安樂國。
（淨12 五VIII）

南無至心歸命禮、西方阿彌陀佛

十一　坐華非一像　聖衆亦難量　「蓮開人獨處　波生法自揚」　無災山處靜
不退爲明良　問彼前生輩　來斯幾劫强　願共諸衆生　往生安樂國。（淨24 18）

南無至心歸命禮、西方阿彌陀佛

十二　光舒救毗舍　空立引草提　天來香盍捧　人去寶衣齋　六時開烏合
四寸踐華低　相看無不正　豈復有長迷　願共諸衆生　往生安樂國。（淨19）

南無至心歸命禮、西方阿彌陀佛

十三　普勸弘三福　咸令滅五燒　發心功已至　係念罪便消　鳥華珠光轉
風好樂聲調　但忻行道場　寧愁聖果遙　願共諸衆生　往生安樂國。（淨23）

南無至心歸命禮、西方阿彌陀佛

十四　珠色仍爲水　金光卽是臺　到時華自散　隨願華還開　遊池更出沒
飛空互往來　直心能向彼　有善併須廻　願共諸衆生　往生安樂國。（淨27）

南無至心歸命禮、西方阿彌陀佛

十五　洗心甘露水　悅目妙華雲　同生機易識　等壽量難分　樂多無廢道
聲遠不妨聞　如何貪五濁　安然火自焚　願共諸衆生　往生安樂國。（淨29）

南無至心歸命禮、西方阿彌陀佛

十六　臺裏天人現　光中侍者看　懸空四寶閣　臨廻七重欄　疑多邊地久

德少上生難　且莫論餘願　西方已心安　願共諸衆生　往生安樂國。（淨30　五x）

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十七　六根常合道　三塗永絶名　念頃遊方遍　還時得忍成　地平無極廣
風長是處清　寄言有心輩　共出一苦城　願共諸衆生　往生安樂國。（淨28）

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十八　哀愍覆護我　令法種增長　此世及後世　願佛常攝受　願共諸衆生　往生安樂國。

南無至心歸命禮西方極樂世界觀世音菩薩

十九　千輪明足下　五道現光中　悲引恒無絶　人歸亦未窮　口宣猶在定
心靜更飛通　聞名皆願往　日發幾華叢　願共諸衆生　往生安樂國。（淨15）

南無至心歸命禮西方極樂世界大勢至菩薩

二十　慧力標無上　身光備有緣　動搖諸寶國　持座一金蓮　鳥群非實鳥
天類豈眞天　須知求妙樂　會是戒香全　願共諸衆生　往生安樂國。（淨16）

南無至心歸命禮西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆願共諸衆生往生安樂國。

普爲師僧父母及善知識法界衆生斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸懺悔

とある。一讀一過慧敏な讀者は、既に直覺されたことであらう、宸翰淨土詩とこの晨朝偈とを比見するに、多少の字面の修正、頌句の變位、排列の變改等はあるにしても、兩者の間にも密接なる親子關係の存在を認めること、先きの「五會法事讃」の場合と全く同じであることに氣

付かれたであらう。而してこの「往生禮讃晨朝偈」と「五會法事讃」との間にも相互共通せるものありて、正に兩者は姉妹關係に立つことをも亦同時に了解されたことであらう。而して兩者は各々別々に同源の藍本によつてゐることは明かである。それは後段詳述するやうに、兩者の間にその採用句の上に互に出入あることでも分るのである。

宸翰「淨土詩」に於いて白圈點を附せる字面を、「晨朝偈」にありては黑圈點を附せる文字に改めてゐるのみである。唯、一二著しき變位は、後者の第五頌に於いて、その第一句二句を淨土詩14の第一、二句により、第三より八句迄を17のそれを採れること、及び第十一頌に於いて、第一、五、六、七、八句を淨土詩24の各々それを取り、第三、四句を18のそれよりし、第二句は全然書換へてゐる點あるのみである。

卽ち「往生禮讃」と「淨土詩」との關係を表示すれば次のやうになる。

往生禮讃……	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十九	二十	十八
淨土詩……	(1)	(2)	(13)	(5)	(14)	(7)	(10)	(8)	(11)	(12)	(24)	(19)	(23)	(27)	(29)	(30)	(28)	(15)	(16)	：

各〻の頌首に南無至心歸命禮西方阿彌陀佛とあり、頌尾に願共諸衆生往生安樂國とある點も、「五會法事讃」の場合と何等異らない、只「五會法事讃」にあつては「南無」の二字を缺き、更に又「哀愍覆護我云云」、「南無至心歸命禮西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆」、「普爲師僧父母及善知識法界衆生云云」の諸句が省略されてゐることは直ちに解るであらう。「淨土詩」も亦此等の諸句は全然附してゐない。これらのことに就いては後說解明するところあるであらう。次にも

う一つ「晨朝偈」と「五會法事讃」と異るところは、後者にあつては常に呼びかけの稱名は、阿彌陀佛に限つてゐるに對し、前者にあつては、その第十九、二十に於いて、一は觀音菩薩を、一は勢至菩薩を稱へてゐることである。

以上の比較對照によつて、淨土詩、往生禮讃晨朝偈、五會法事讃一切恭敬頌、この三者の間に離るべからざる親緣のあることを認めないわけには行かぬこととなつた。

いま「五會法事讃」「淨土詩」「往生禮讃」の三者の關係を一目瞭然たらしむる爲に掲表すれば次のやうである。

	五會法事讃	淨土詩	往生禮讃 普通使用	往生禮讃 續藏所傳	往生禮讃 續藏大正
	I	1	一	一	一
	II	2	二	二	二
	III	3	四	四	四
	IV	4	六	六	八
	VI	5	八	八	十
	XI	6	七	七	九
	VII	7	九	九	十一
	VIII	8	十	十	十二
		9	三	三	三
		10	五	五	七
		11	九	九	五
		12	二十	二十	六
		13	五十一	五十一	十四
		14	十二	十二	十五
	勢至	15			十三
	觀音	16			十六
		17	十三	十三	十七
		18	十四	十四	十八
		19	十五	十五	十九
		20	十六	十六	二十
		21	十七	十七	二十一
		22	十八	十八	二十二
		23	十九	十九	二十三
		24	二十	二十	二十四
		25	二十一	二十一	二十五
		26	二十二	二十二	二十六
		27	二十三	二十三	二十七
		28	二十四	二十四	二十八
		29	二十五	二十五	二十九
		30	二十六	二十六	三十
	x	31	二十七	二十七	三十一
		32	二十八	二十八	三十二

右の表から次のことが成立する。即ち「五會法事讃」十一頌中、「往生禮讃」十九頌第十八番目は除外す、後に說明する)と重複するもの、換言すれば「淨土詩」「往生禮讃」「五會法事讃」の三者に共通せるものは八頌ある譯となる。(1)(2)(7)(8)(10)(12)(13)(30)が即ちそれである。「淨土詩」「法事讃」にのみあつて「禮讃」に缺くるもの三頌ある、即ち(4)(6)(9)これである、依つて次の恒等式を見る、

往生禮讃＋五會法事讃＝淨土詩－10

19　＋　(11－8)　＝22

聖武天皇宸翰によつて傳へられたる所謂淨土詩は三十二首あれば、「五會法事讃」と「往生禮讃」とによつて傳へられたる二十二頌を差引けば、殘りの十首が、宸翰によつてのみ書殘されたものとなる。そのうち多少交錯せる二、三首もあるから、結局(3)(20)(21)(22)(25)(26)(31)(32)の八首だけが、若し宸翰に書寫されなかつたならば、永久に散佚して了つたものであらう。これで法照・善導の殘せる二姉妹書によつて、宸翰淨土詩の親元が明かとなつた譯である。

「往生禮讃」中何故に第十八番目を除外したかに就いて一言しておく必要がある。それはこの「哀愍覆護我云云」の偈は、六時禮讃中毎時必ず稱唱するもので、必ずしも晨朝偈にのみ限つたものでないからである。而して又これは善導の獨創ではなく、曇鸞既にその「讃阿彌佛陀偈」の中に用ゐてゐる。[17] 啻に晨朝偈ばかりでなく、「往生禮讃」全體の形式、即ち各偈必ずその前に「南無至心歸命禮云云」で初まり、「願共諸衆生云云」で結び、十數偈又は數十偈の間は阿彌陀佛を稱し、最後に近く、「觀音、勢至の二菩薩を唱ひ、最終に於いて「南無至心歸命禮西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆云云」「普爲師僧父母及諸知識云云等、一字も變更することなく、曇鸞に借りてゐることとは大に注意すべきことである。曇鸞の「讃阿彌陀佛偈」は、初め自行の禮課とせるものらしく、爲にその撰號を缺き、何人の作か不明であつたやうである。それゆゑ羅什の撰と誤傳[18]してゐる向きさへある位である。

先きに示した三者對照表中に見える如く、續藏所傳(日常寺院にて使用)と縮藏(大正藏はこれを踏襲)所傳とは、全くその排列を異にしてゐる。即ち續藏にあつては、觀音・勢至を最後の

第十九、二十に据ゑてゐるに對し、縮藏に於いては、略ぼ中央卽ち十九のうち第五、六に置いてゐる。然るにこれを淨土詩に見るに、全三十二首中その第十五、十六に配して正しく中央に列してゐる。その他全體の摘錄の仕方が縮藏にあつては、大體順序になつてゐるに反し、續藏にあつては、その顚倒し方が大きいやうである。縮藏は麗藏により宋・元・明の大藏を參酌し、續藏は多分黃檗版によつたのではなからうかと思はれるから、實際聲唱した結果の調子や、何かの關係で、不便を整理したものではなからうかと思ふ。現に實地使用されてゐる方が實際勢力はある理であるからである。然し原形は恐らく縮藏の傳へてゐる方にあることを斷言してよいと思ふ。この宸翰淨土詩の出現から、さうした校覈も出來る譯である。

善導の引用せる彥琮法師の「願往生禮讚偈」及びその作者彥琮に就いては、節を改めて述べることとし、もう一つこゝで斷つて置かうと思ふことがある。

それは前揭せる淨土詩は、全部で三十二首を擧げてゐるが、これで完璧のものか、或はより長きものより聖武天皇の拔書し給ひしものかといふことである。自分はこれでコンプリートのものであらうと思ふ。といふ譯は三十二といふ數は、佛敎に於いては、一種の聖數(ホリーナンバー)であるからである。[49]

最後に所謂淨土詩なるものが、最初からかうした形であつたらうかといふことである。極樂にあつては、一陣の淸風寶樹に吹くとき、常に微妙な音聲を發するとは、普く淨土所依の諸經の說くところである。淨土讚詠の源はそこから發する。支那にあつては、早くも北魏

に、曇鸞出でて讃詠念佛の淨土敎を創め、唐に善導現はれてこれを盛んにした。前者に「讃阿彌陀佛偈」の著あり、後者に「往生禮讃」の撰があることは前に述べた。

その後をうけて法照亦「五會法事讃」を撰して、多くの讃詠を作つた。これ等三人の築き上げた淨土敎の儀軌は、その法城に立籠る人々の唯一の力となりて傳はり、やがて我が國へと流れ入つたのである。かく曇鸞と善導の間に出た彥琮が、前に曇鸞の影響をうけ、後に善導に影響を與へてゐることは明かであるから、彥琮の「願往生偈」なるものも、宸翰淨土詩の傳ふる如き讃文のみではなく、その各首の前に禮文あり、各首の後に廻向文が附いてゐはしなかつたらうかと思はれる。

四　彥琮の略傳及びその著述

前節に說いた「往生禮讃」晨朝偈や「五會法事讃」一切恭敬頌に引用された「願往生偈」の作者、彥琮に就いては、餘り世に知られてゐないから、こゝに略述しておかうと思ふ。

釋彥琮の傳は道宣の「續高僧傳」に「隋東都上林園翻經館沙門釋彥琮傳」として詳しく載つてゐる。[50] 道宣は彥琮と同時代の人であるから、この記述はかなり信憑するに足る正確さを有つてゐる。[51] 頗る詳しいものであるが、いま略してこれを言はう。

彥琮は「世號衣冠門族稱甲族」[52]とあるから相當の家の出身である。趙郡栢人の地といふ先きの直隷省順德府下に、陳の武帝永定元年(西紀五五七)に生れた。俗緣は李氏、多くの名僧に

あるが如く彼も亦幼にして聰敏、殊に詩藻頗る清新なるものがあつた、その如何に聰敏であつたかは、初め信都の僧邊法師に投じたとき、試みに「須太拏經」七千言を誦せしめた所、一日にしてこれを了したと言はれてゐることでも分らう。十歲剃髮して道江といふ。「十地論」を聽き、十二歲「法華經」を誦してこれを究め、鄴下に遊んで講席を循り、後鄕寺に歸つて「無量壽經」を講じたとあるから驚かざるを得ない。

十四歲北齊武平初年西して晉陽(山西省太原)に入り、且つ講じ且つ聽く。尙書敬長瑜及び朝秀盧思道・元行恭・邢恕等の諸名士風を欽し、爲に齋會を設けて請じて「大智度論」を聞いた。その名聲汾・朔の間に振つた、時に齊后晉陽に幸し、宣德殿に召して「仁王經」を講ぜしめ、帝亦親しく講筵に臨御し、百官ともに皆侍したといふから、如何に非凡の天才であつたかが窺はれよう。十六歲の時、父の喪に遭つてから大に名聞を厭ひ、退いて篇章に意を注ぎ、子史に至る迄通閱しないものはなかつた。右僕射楊休之竝に文林館の諸賢とも交好し、具足戒をうけて後は、專ら律典を究めた。青年時代に如何に彼が黽勉讀書に耽つたかを知るべきである。

その二十一歲のときである。北周の武帝齊を滅し(西紀五七七)、彼召されて、勅して通道觀學士に揚げられ、宇文愷等の朝賢と共に、大易老莊を以て陪侍講論し、外に俗衣を假ると雖も內常に法服を持し、名を彥琮と更めた。宣帝のとき每夜內廷に入りて談論するに際し、正法を述べて大に嘉賞を蒙り、禮部の官に擬せられたけれども、堅く辭して就かなかつた。朝士王邵・辛德源・陸開明・唐怡等とその情交細かにして琴瑟に等しかつた、皆號して文外の玄友と

爲した。この數年間彼は還俗のやうな狀態、言はゞ半俗半僧のやうな生活を續けて來たのである。

大象二年(西紀五八〇)楊堅(隋文帝)入りて相となるに及び、佛法稍興り、彼また諸賢の爲に「般若」を講じた。大定元年正月曇延等と共に同じく奏して落髮を許された、これ彼が二十五歲のときである。

この年二月十三日楊堅周の禪をうけて隋室の基を開き、年號を開皇と改めた。これより佛敎盛に興り、爲に彼は四時講筵を續け、京師の道俗みなその風化に浴した。煬帝との關係はこれからであるが、それは後に節を改めて述べることとする。

かくて後或は大興國寺、日嚴寺等に住して法を講じ、翻經館に入つて譯經に從事し、その間論作に活躍し、多くの著作を遺して煬帝の大業六年七月廿四日、下痢を發して、五十有四歲を以て、洛陽の上林園翻經館に寂を示したのである。[53]

次に彼の著述に就いて少しく述べて見度い。彥琮の著述は極めて多い、けれども遺憾ながら現存のものは甚だ尠少である。前にも述べたやうに、彼は內典外典ともに究め、又當世の文人朝士と交つてゐた關係上、唯單なる僧としての著作に留らず、或は學者、詩人としての著作もあること、又政治に直接に干與はしなかつたけれども、多少政策的のものもあることは見逃してはならぬ。後にも詳說するが、文章に堪達であつたこと、故典に通曉してゐたことは、當時他の文宗と肩を竝べて少しの遜色もなかつた。

いま彦琮の著述を傳ふる文獻二三を掲げる。彼の傳記に於いて詳細且つ的確である如く、その著述を傳ふることも、道宣の「續高僧傳」が一番豐富である。

福田論、僧官論、辯正論、慈悲論、默語論、鬼神錄、通極論、辯聖論、通學論、善知識錄、辯教論、西域傳、天竺記、舍利瑞圖經、國家瑞祥錄、內典文會集、沙門名義論別集、衆經目錄、崑崙書目錄、唱導法、及び諸經之序。

等卽ちこれである。[54] 同じ道宣がその「大唐內典錄」に於いては次の如く書いてゐる。

隋朝日嚴寺沙門釋彦琮撰諸論傳二十許卷、別集十卷、

通學論、辯教論、辯正論、通極論、福田論、僧官論、善財童子諸知識錄、笈多傳四卷、西域志十卷、諸新經序。

とあり、[55]イ「續高僧傳と殆ど合致し、唯「笈多傳」四卷が前者に見えないだけである。以上の二書では、それ〳〵の卷數を示してゐないが、道世の「法苑珠林」によれば、

達摩笈多傳四卷、通極論一卷、辯教論一卷、辯正論一卷、通學論一卷、善財童子諸知識錄一卷、新譯經序福田論一卷、僧官論一卷、西域玄志十卷、

右此十部二十二卷隋朝日嚴寺沙門釋彦琮撰。[55]ロ

と明かに卷數を示してゐる。然るに劉昫の「舊唐書」は、その經籍志[56]に「崇正論」六卷釋彦琮撰とあるのみであるが、歐陽修の「新唐書」藝文志には、僧彦琮「福田論」二卷、「崇正論」六卷、又「集沙門不拜俗議」六卷とあり、[57]同書は更に十數行後に至つて、僧彦琮「大唐京寺錄傳」十卷、又「沙門不敬錄」六卷、

〔割註〕龍朔人竝隋有二彥琮」との記載をしてゐるが、[58]卷數も合はない。

以上二十種許の彼の著述中、福田論は大業三年煬帝に奉つたもので、その前年諸僧道士等に王者を敬すべき詔を下せるに對せる抗議書である。[59]辯正論は翻經上の諸般の注意を書しその式を示したものである。「然琮久參傳譯、妙體梵文、此土群師皆宗鳥迹、至於音字詁訓、罕得相符、乃著辯正論、以[60]垂翻譯之式」と道宣も書いてゐる。通極論は世俗の諸儒因果の理法を信ぜざるを破したものである。この三論は幸にも道宣の「廣弘明集」、梅鼎祚の「釋文紀」、嚴可均の「全隋文」等に收錄されて現存してゐる。[61]

又辯教論は開皇三年道士を折伏せるもので、道教の妖妄を二十有五ヶ條を指摘し、文帝に獻じたものであり、辯聖論は釋教は眞を宣べ孔教は俗を弘めるもので、老子教を論ずるは俗儒と異らないことを說き、通學論は儒流を勸引し遍く孔釋を師として內外を知らしむるもの、善知識錄は善友によるにあらずんば人達すべきなきを說いたものであるさうであるが、是等はいま全く亡佚して傳はらない。僧官論、默語論、鬼神錄等に至つてはその輪廓すら知るを得ない。「沙門名義論別集」五卷に就いては「並詞理淸簡、後學師欽」とあり、「西域傳」十卷(仁壽二三年頃)に就いては「素所暗練、周鏡目前、分異訛錯、深有徵擧、故京壤名達、多尋正焉」とあり、裴矩と共著に成れる「天竺記」(大業五年頃)に就いては「文義詳洽、條貫有儀」とある。若しこれ等が現存してゐたならば、玄奘の「西域記」以前の西域史に一大光明を放つたかも知れないが、いま傳はらないのは甚だ遺憾である。「笈多傳」は隋東都雒濱上林園翻經館南賢豆沙門達摩笈多の

傳であらう。彼は琮と共に傳譯に參預した梵僧である。[62] 前掲著述目錄中には見えなかつたが彥琮は又、隋西京大興善寺北天竺沙門那連耶舍傳を書いてゐると、道宣は「沙門彥琮爲之本傳」[63]と那連耶舍傳に記してゐる。內典文會集は陸彥師・薛道衡・劉善經・孫萬壽等の一代の文宗と共に著はしたものである。唱導法に就いては後に詳說するところあるであらう。

これ迄擧げた諸の著述だけを以て見ても、その如何に達文であつたかを想像するに難くはない。そして文章に堪能であつたことが京師に評判であつたことは、道宣が「琮以洽聞博達素所關心、文章騰翥京輦推尙」と書いてゐることでも明かである。[64]

これだけの能文家がこれだけの著述を遺したのに、遺憾ながら今日その大半は亡佚して傳はらないに就いては、こゝに一つ有力な理由がある。それは唐高祖武德七年に、彥琮の住持してゐた西京長安日嚴寺が廢されたことである。[65]

卽ち武德四年六月二十日太史令朝散大夫傅奕が、寺塔僧尼を滅省し、その國帑を以て、國を益し民を利するの策十一ヶ條を上奏した[66]ことが、法琳の「破邪論」及び「唐書」傅奕傳[67]等に見えてゐる。日嚴寺はその最初の犧牲になつたものらしい。かくて彼の著述の多くは、このとき散逸し、次いで湮滅に歸するの期を早からしめたのではなからうか。彥琮寂後丁度十五年目にこの厄に遭つてゐる、若しこの災禍が無かつたならば、恐らく現在傳ふるよりは、より多くの著述も殘存したことであらうと思はれるが、洵に惜しいことである。

さて諸の新經の序を制したとあるが、それはどんなものであつたらうか。

1 大隋業報差別經　開皇二年三月譯　智還大興寺に於いて翻出　智鉉筆受　文詞詮序義理
日嚴寺沙門趙郡釋彥琮製序

2 象頭精舍經　開皇二年二月譯

3 大乘方廣總持經　開皇二年七月　北天竺烏場國三藏法師毗尼多流支　於大興寺譯出　大
興善沙門釋法纂等筆受　爲隋言併整文義　沙門彥琮竝製序

4 百佛名經　開皇二年自十月至五年十月　勘校訖了　竝沙門彥琮製序

5 佛本行集經六十卷　七年七月起　十一年二月訖　僧曇學士長房劉憑等筆　彥琮序

6 虛空盈菩薩經二卷　七年正月起　三月訖　僧曇筆受　彥琮序

7 月上女經二卷　十一年四月翻六月訖　劉憑等受　彥琮序

8 善思童子經二卷　十二年七月起　九月訖　長房筆受　彥琮序

9 一向出世菩薩經　五年十一月出十二月訖　僧曇等筆受　彥琮序

10 大威燈仙人問疑經　六年正月出二月訖　道邃筆受　彥琮序

11 文殊尸利行經　六年三月出四月訖　僧曇筆受　彥琮序

12 八佛名號經　六年五月出六月訖　道邃筆受　彥琮序

13 善恭敬師經　六年七月出八月訖　僧曇筆受　琮序

14 希有校量功德經　六年六月出其月訖　僧曇筆受　彥琮序

15 如來方便善巧呪經　七年正月出二月訖　僧曇筆受　琮序

16　不空羂索觀世音心呪經　七年四月出五月訖　僧曇筆受　琮序

17　十二佛名神呪除障滅罪經　七年五月出訖　僧琨筆受　琮序

18　金剛場陀羅尼經　七年六月出八月訖　僧琨筆受　琮序[68]

19　合金光明經八卷　開皇十七年　合當第四本　沙門彥琮製序[69]

これ等の諸經は悉く彥琮の序を書せるものである。その他或は文義の整理に、或は梵本の對比に、或は校勘推敲に彼の手を煩はしたもの、その數實に百に近かつた。少くとも道宣の「大唐內典錄」の成れる高宗の麟德元年(西紀六六四)にそれだけ現存せることは次の記錄が力强く物語つてゐる。

〔開皇〕十二年來、在大興善寺禪堂內出沙門笈多、高天奴兄弟等助、沙門明穆、沙門彥琮重對梵本、再更覆勘、整理文義、其外尙有九十餘部見在。[70]

彼は又文章に秀拔であつたのみならず、翻譯の天禀の所有者であつたことは、左の一二の例證を見たら、讀者は容易に首肯することであらう。

それは彼の傳中その開皇三年(西紀五八三年)の條に「其年西域經至、卽勅翻譯旣副生願」[71]と見え、又仁壽二三年(西紀六〇二—三)の頃である。印度王舍城より一人の沙門來つて文帝に謁し、將に本國に還らむとして、請ふに「舍利瑞圖經」及び「國家祥瑞錄」を以てしたことがある。そのとき琮に勅してこれが翻譯をなさしめたるに、立ちどころに譯成つて[72]兩者合せて十卷、以て文帝に奉つたところ、文帝これを西域僧に賜つたことがある。又煬帝が大業元年(西紀六

○五年)新に林邑を平げ佛經を占領して來たことがある。その「數百六十四夾、一千三百五十餘部、皆崑崙書、多梨樹葉」であつた、勅有つて翻經館に送つて琮に付して披覽せしめ、先づ目錄を編叙し、次いで漸次に翻譯せしめたるに經律讃論方字雜の七例に分ち、目錄五卷を製し、二千二百餘卷を譯了した。前者は隋文から梵文に、後者は崑崙より隋言に譯したものである。

最後に「衆經目錄」に就いて一言しておき度い。隋開皇十四年七月十四日(西紀五九四)、大興善寺勅翻經沙門法經等撰と傳へられてゐる「衆經目錄」七卷は、入藏して今日現存してゐる、これも大興善寺翻譯館總裁たりし法經の名で殘つてゐるが、實は彥琮等の專ら携つたものであることは申す迄もない。智昇の「開元釋敎錄」は、開皇十四年(西紀五九四年)五月十日に文帝の勅を以て法經等の二十大德が輯撰してこれを成すとのあとをうけ、

揚化寺沙門明穆、區域條分、指縱紘絡、日嚴寺沙門彥琮、覩縷緝維、考校同異[71]

とあることに依つて明かである。

更に又その後仁壽二年(西紀六〇二)、彥琮が單獨で勅を奉じて「衆經目錄五卷を撰したことは彼の傳中にも「開元釋敎錄」[72]にも見えてゐる。この五卷本の「衆經目錄」は、既に亡佚して今日傳はらないと言はれてゐるが、自分の考では、唐の高宗の龍朔三年正月二十二日勅を奉じて釋靜泰の撰した「大唐東京大敬愛寺一切經論目錄」[73]なるものに合糅してゐると思ふ。靜泰はこの彥琮撰仁壽本(五卷)と、法經撰開皇本(七卷)とを誤つて混同し、爲に仁壽本をその底本としてをりながら、これを開皇本として傳へた結果、彥琮の「衆經目錄」は逸し去つて了つたやうに

見えるけれども、實は靜泰の撰中に合糅してゐる。卽ち靜泰は仁壽本に玄奘の新譯を增補したに過ぎない。その最も見易い證據は、卷數が五卷であつて決して七卷でないことである。これ等に就いての比較考證は煩はしいからいまは省くこととする。

以上で大體彥琮の著述に就いての考は終る、唯こゝに殘されたのは、歐陽修の「唐書」藝文志の記載である。「福田論」に就いては既に說いた、「崇正論」六卷は「續高僧傳」「大唐內典錄」「法苑珠林」共に記してゐない。崇字恐らく何かの譌字であらう。最も奇怪なるは、「集沙門不拜俗議」六卷、「沙門不敬錄」六卷、「龍朔人幷隋有二彥琮」の記事である。この疑問は次に節を改めて解明するところあるであらう。

五　隋の彥琮と唐の彥悰

彥琮の略傳と著述とに言及した自分は、こゝに一つ明白にしておかねばならぬことのあるを發見した。この際これを正しておくことは、將來の佛敎史家の同一誤謬に墮することの無からしめむが爲に外ならぬ。

既に前節に於いて暗示した如く、彥琮の著述として、「續高僧傳」にも、「大唐內典錄」にも又「法苑珠林」にも全く收錄されてゐない「集沙門不拜俗議」六卷といふ書物である。從來前揭「唐書」藝文志の記事に就いて誰も疑を抱いたものは無かつた、然し、虛心坦懷に「唐書」の記事を披見したならば、誰か疑問を挾まずにゐられようか。卽ち「藝文志」に、

僧彦琮。福田論二卷　崇正論六卷　又集沙門不拜俗議六卷

と一方に書きながら、更に十數行後に至つて又、

僧彦琮。大唐京寺錄傳十卷　又沙門不敬錄六卷

と掲げ、而もその後に割註して「龍朔人幷隋有二彦琮」と書してゐることである。

然らばこの「集沙門不拜俗議」と「沙門不敬錄」とは、全然別書であらうか、將又同一の書物を別の呼稱で呼んでゐるのであらうか、若し假に琮と悰(後に說く)とに別々にかうした著書があるとしても、餘りに題名が暗合し過ぎてゐないであらうか、又卷數にしても共に六卷であるところにも疑點がある。この唐書の記事は批判なしには、信據することはどうしても出來ないことになる。

さて前節に於いて述べた如く、隋大業六年(西紀六一〇)七月に示寂した彦琮が、唐の京寺錄を書く筈がないことは說明する迄もないことである。これはかの有名な「大唐慈恩寺三藏法師傳」[77]十卷の著者彦悰でなければならぬ。この隋代の彦琮と唐代の彦悰との混雜は啻に「唐書」藝文志ばかりを責むべきではない。唐代而も佛教目錄家の間にも既に錯誤があるやうであるから、明治、大正、昭和に出でた諸著述[78]にも紛糾してゐるのも無理のないことである。

「大唐內典錄」第五には、「〇大唐京寺錄傳一部十卷龍朔元年修緝〇沙門不敬錄六卷右二部京師弘福寺沙門釋彦琮撰云云」[79]とあるに拘はらず、同書第十には「〇皇朝弘福寺沙門釋彦悰撰大唐京寺錄一部一十卷云云」[80]と記してゐる。

道世も同一誤りに墮しその著「法苑珠林」に於いて、左の如く記して居る。

「西京寺記」二十卷「沙門法琳別傳」三卷「沙門不敬錄」六卷右此三部二十九卷皇朝西京弘福寺沙門釋彥琮[80]撰

これ或は校正の嚴密に行はれたものを見たら、こんな譌りはしてゐないかもしれぬけれども、少くとも自分の見た縮藏などにはかうなつてゐる、蓋し琮悰同音で、字形も亦酷似してゐる關係から、誤寫された結果に外ならない。

智昇の「開元釋敎錄」を檢するに、「○集沙門不拜俗議六卷見內典錄、右一部六卷其本見在[81]」とあるから、智昇は慥に現物を見てこの目錄に著錄したものに相違ない。而して智昇はなほその後に大體次のやうに書いてゐる、釋彥悰○は識量聰敏にして、博く群經に曉く、善く文華を屬し、尤も著述に工みである。天皇高宗龍朔二年壬戌詔を下して令して君を拜せしめた、國化の傷くのを恐れて、百司をして遍く議せしめた所が、時に沙門道宣等と共に書啓を上つて、朝廷に聞した結果、衆議論を異にして大に沸騰したが、所司の進言で聖躬ら御覽あつて、勅を下してこれを罷めるに一決した。然し悰は後來再度かゝることがあつてはならぬといふので、斯事竝に前代の故事、及び先賢の答對等を纂して「集沙門不拜俗議」と爲して、これを後代に傳へて、永く楷模と作して法城を護ることとしたと。その後部に「兼撰大唐京寺錄、行於代」と附記してゐる。然るに同じ智昇がその「開元釋敎錄略出」[82]に於いては「唐弘福寺沙門彥琮○撰集沙門不拜俗儀六卷」と誤記してゐるが「開元釋敎錄」には隋の彥琮のこの著に就いては、全く載錄を

見ない。

ついで「唐書」高宗本紀を繙いて見るに、龍朔二年六月乙丑(七日)の條に、

初令道士女冠僧尼等、竝盡禮致拜其父母(83)

とあつて、この智昇の「釋教錄」と全く一致する。「內典錄」はこの龍朔二年の出來事を元年としたのも、その書名も異稱「沙門不敬俗錄」を出してゐるのも共に正しくないこととなる。

「唐書」の作者歐陽修も、その藝文志を編するときに「廣弘明集」や「內典錄」や「開元釋教錄」を見たに相違ない、そしてそれ等の諸記錄に二つの相似たる書名と、酷似せる作者の名とに會し、深く同異考校することなしに、これを採錄した結果、その辨別に苦める揚句、明かに隋の彥琮と唐の彥悰とは、時代的にも名の字に於いても違つてゐるのに「幷隋有二彥琮」と頗る叮嚀な誤を重ねたのである。これは形の上から生じた誤解に基づいた結果に外ならないが、又實質上からも謬られる多少の事情がないでもない。

それは隋の煬帝の時にも、唐の高宗の時と全く同一事件があつたからである。卽ち大業二年に、煬帝は帝京に還り南郊に於いて盛に軍旅を陳した時に濫僧の朝憲を染する者があつた事上聞に達し帝大に怒つて諸の僧道を召し、御前に列し、勅を下して責めての語に、

條制久頒、義須致敬

と、そのとき黃老の士女(道士、女冠)は、初めて聞いて卽座に帝を拜したが、惟釋一門は儼然として屈せず、加之終南山智炬寺の釋明瞻の極力抗辯した記載が「續高僧傳(84)」中に見えてゐる。「廣

弘明集」は、かうした事件を大業三年と五年の兩度にあつたとなし、その三年の方に、

隋煬帝大業三年新下律令格式、令云、諸道士等有所啓請者、竝先須致敬、然後陳理、雖有此令僧竟不行、時沙門釋彥琮不忍其事、乃著福田論以抗之、意在諷刺、言之者無罪、聞之者以自誡也、帝後朝見、諸沙門竝無致敬者。[85]

とし、明瞻の事件を大業五年のこととしてゐる。念常の「佛祖歷代通載」は大業元年とし、[86]志磐は「統紀」に「續高僧傳」をうけて大業二年としてゐる。[87]そは兎も角として煬帝の大業初期に於いて王者、父母を致敬すべき勅のあつたことだけは事實である。而して前に述べた彥琮の「福田論」は、これに對する抗辯書として上つたものであることは、前掲の「廣弘明集」の文でも明白である。さすれば隋の彥琮にも、致敬王者問題のあつたこと、それに關する著述のあつたことも確固たる事實である。かうした實際の事件が兩時代にあつたことも、後の史家、否當時の記錄者をして混雜を生ぜしむるに十分な原因となつたことは、想像に難くない。

なほ琮悰の混同は唐代既に明瞭を缺いてゐたことは、次の一事でも證せられよう。卽ち「廣弘明集」の作者道宣が「沙門不應拜俗總論」といふ一文を、釋彥琮の撰として著錄してゐることである。これは明かに彥悰の作であると自分は思ふ。といふ理由は、「廣弘明集」卷第二十五を仔細に研究すれば、自ら解ると信ずるからである。道宣はその卷の劈頭に、

僧行篇五之三、

福田論　隋沙門釋彥琮、

問出家損益詔幷對　唐高祖

出沙汰佛道詔　同上

令道士在僧前詔幷表　唐太宗

議沙門敬三大詔幷議狀表啓論　今上皇帝〔高宗〕

と年代順に書し、なほ、道宣、靜邁、その他の人々の反對上奏文も、年代順に出し、最後に近きところに「今上〔高宗、龍朔〕停沙門拜君詔一首」とし、卷尾に「沙門不應拜俗總論」と書し、行を改めて「釋彥琮曰云云」としてゐる。[88] いまこれ等收錄の仕方を見るに、總て年代順になつてゐるところより察すれば、彥悰とするのが自然である。さすれば、高宗の龍朔年間のこと故、順位としてここにあつても一向差支ないことになる。若し彥琮のものとすれば、これ一つが離れて隋代のものがこゝに這入ることが既におかしく、又前例に倣つて隋彥琮と明記すべきであらうし、更に又嚴重に言へば福田論と竝記しておくべきである。然るに隋彥琮となく、只釋彥琮とある所から見ても、この書の書かれた當時の人であるとする方が無理がないと思ふ。而してその題名に「總論」とある點も、隋の彥琮としては解しにくい、これを唐の彥悰のものとし、「集沙門不應拜俗等事」の卷頭なり、跋尾なりに附せば、その「總論」の意味も徹底してくると思ふ。かく考へて、自分は飜つて彥悰の「集沙門不應拜俗等事」を見た所が、正しくこの總論を悰の作とし卷末に附してゐたのは全く自分の推測通りで愉快であつた。して見れば「沙門不應俗總論」は、悰の「集沙門不應拜俗等事」に附すべきを、道宣が誤つてこれを單獨に抽記し、釋彥琮の

ものとして收錄したのが俑を作つて、後世の史家を惑はす所以となつたのである。恐らく「唐書」藝文志もこの邊にあやまられた結果であらうし、嚴可均も「全隋文」中に釋彥琮の文として「沙門不應拜俗總論」を採つてゐるのも、これに惑はされたのである。梅鼎祚が「釋文紀」に收錄しなかつたのは、恐らく知らなかつたのであらうが、怪我の功名とすべきである。我が縮藏、卍字藏、大正藏の殆ど全部が、この間違を繰返して、全然同一の文を一は彥琮の名に於いて「廣弘明集」中に載錄し、一は彥悰の名に依つて「集沙門不應拜俗等事」卷尾に採取して、[89]何等の疑を容れないでゐるのは甚だ遺憾である。

これを要するに、同一似寄の事件が、隋唐兩代にあつたことと、作者の名が酷似してゐた爲とによつて、兩者の間に混雜を生じ、唐代にあつて既に混同されて了つてゐたことが明瞭となつたことと信ずる。それゆゑ隋の彥琮には「集沙門不拜俗議」六卷などの著は、全くないもので、「續高僧傳」「內典錄」「開元釋敎錄」「法苑珠林」等に載せないのは自明の理である。若しこの證明にして幸に誤ないとすれば「唐書」藝文志の記事、少くとも彥琮の條は、その書名もその卷數も甚だ信を措き難いこととなる。以上で「唐書」藝文志に於ける彥琮二人說の疑問も解決した譯である。

六　淨土詩と煬帝と彥琮との關係

上來見來つた所では、善導の引用にかゝる「彥琮法師願往生禮讚偈」なるものは、彼の著述中

に見當らない。然らば善導の引用に疑があるかといふにさうではない。といふ譯は彼がその「往生禮讃偈」に採用した出典は、各〻依憑するところ確實であるからである。

例へばその第四の「天親菩薩願往生禮讃偈」に依つたとあるも、これとて決してかやうな名稱のものがあるのではなく、正しくは「無量壽經優波提舍願生偈」[90]であつて、天親菩薩の造にかかり、北魏菩提流支の譯したものに據つてゐる。また第三の「龍樹菩薩願往生禮讃偈」とあるは「十二禮」と題せるものにして、禪那崛多三藏別譯龍樹讃禮阿彌陀佛文に憑つたものであり[91]次に第二の善導が「大經」によつて要文を採集して以て讃偈を爲るとあるは「佛說無量壽經」下卷三十行偈及び長行の十四佛國の往生文等より採り[92]、第一も同じく「無量壽經」上卷[93]の十二光佛の文に基づいたものであることは明かである。最後に第六「善導願往生偈」とは、專ら「佛說觀無量壽經」[94]によつて善導自ら作つたものである。

かくの如く六時禮讃の他の五時に就いては、一々底本になつたものの正しい書名をあげずに便宜上略稱を用ひてゐる、又聲を立てゝ曲に合せて歌ふものである關係上、簡潔にする必要もあつたであらうし、文の體裁の上からも揃へる必要もあつたであらう、ともに等しく「何某の願往生偈」としたものであることが首肯かれる。

果して然らば彥琮の願往生禮讃偈とは何であらうか。これ自分が先きに、後に說かんと約して置いたものである。彥琮の著作中に見える「唱導法」が卽ちこれではないかと思ふのである。

唱導といふ言葉は、六朝から隋唐にかけて二つの意味があつた、一は教法を說いて人々を開導すること、二は讃唄の類を唱へて佛菩薩を禮讃することをいふ。[95] こゝの意味は言ふ迄もなくその二の場合である。その一二例を示せば、梁簡文唱導佛德文、梁王僧孺唱導佛文などの「廣弘明集」[96]に著錄されてゐるを見れば、直ちに了解されることと信ずる。

淨土讃詠の流は、曇鸞に初り、善導に至りて益〻盛に、降つて法照に及んで大成したものであることは、前にも述べた如くであるが、彥琮は正にその曇鸞と善導との間に位することを注意しなければならぬ。多くの禮讃は決して禮讃文そのもののみでは無く、必ず先づその方法、その順序等を附記してゐることは、前揭法照の「五會法事讃」、善導の「往生禮讃」共に皆然りである。卽ち先づ儀軌を示し、次に禮讃文を揭ぐるのを普通とする。勿論一二の例外はある。[97]

そこでこの「唱導法」もその完稱ではなく、一の略稱ではあるが、その如何なる名稱の略であるかはいま解らない。「唱導法」といふ名稱それ自身からも、最初に如何に懺悔し、如何に禮拜し、如何に讃詠し、如何に廻向すべきかを示し、最後にこの禮讃文——卽ち宸翰に殘れる所謂淨土詩——が載つてゐたものではなからうかと、推定しても決して無理はなからうかと思ふ。既に前にも述べたやうに、善導の「往生禮讃」が、又の名を「西方化導文」と言はれたこともこゝに併せ考ふべきである。かくて彥琮傳を見るに、

又爲諸沙門撰唱導法皆改正舊體繁簡相半卽現傳習祖而行之。

とあつて、從來行はれてゐたものに改革を加へたことも知られよう。舊體とあるは龍樹天

親・曇鸞等の讃文を指したものか否は、いま遽に斷ずることは出來ないけれども、兎に角諸の沙門の爲に撰したとあり、現に傳へて祖に習つてこれを行ふとあるに見れば、この彥琮の新なものが、當時已に行はれてゐたことも察せられる。

若し如上の自分の考にして幸に認められ得るとすれば、こゝに宸翰に奇しくも殘された「隋大業主淨土詩」こそ、その詩藻の極めて雅麗なる點に於いて、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、淨土往生論(所謂三經一論)の內容を巧みに織込める詩才に於いて、彼の一代の文宗たる隋僧釋彥琮の創作になる「唱導法」の一部に載せたりし禮讃卽ち「願往生禮讃偈」であると斷定しても何等の支障を生じまいと信ずる。果して然らば、その原形は今日宸翰雜集に見るが如き形ではなく、先きに曇鸞、後に善導法照のなせる如く、各詩頌の前後に「南無至心歸命禮西方阿彌陀佛」「願共諸衆生往生安樂國」の二十五字が、添付されてあつたものであらうと、前段自分の下した推測もかうしたところにその理由の存するのである。

問題の大業主淨土詩は煬帝の著作にあらずして、彥琮の「唱導法」卽ち「願往生禮讃偈」なることの證明はこれで終つた。然らば次にどうして大業主煬帝の作として傳へられたのであらうか、又何時如何にして我が國へ將來されたのであらうかの問題である。

いまこれ等の問題を取扱ふ順序として、先づ煬帝と彥琮との關係に就いて一瞥しよう。

煬帝未だ蕃邸に在つて、晉王廣と言つた頃のことである。開皇三年彥琮年二十七歲にして文帝東巡の駕に陪從して、幷州(山西省太原)に來たことがある。時に晉王廣は總河北に任

じて幷州に戍してゐた、平素から盛名を聞いてゐた彦琮の來幷をきゝ、早速彼を高第に請じてこれに謁したのが初めである。そこで「親論往還、允愜懸佇」とあるから大に談論風發、意氣相投合したので、彼は暫くこの地に逗ることとなり、初め王は琮を內堂深く住せしめた琮亦王の爲に金光明、勝鬘、般若等の諸經を講じ、次いで大興國寺[98]に請じて住せしめた。彦琮の學問の博く、內外兩典を究め、詩文に長じ、翻譯に於いても天禀の才能の所有者であつたことは前にも既に述べた。こゝに一つ最も興味ある而も從來全く知られなかつた逸事がある。

煬帝が今日殘してゐる釋教關係の願文、疏文、詩等は相當にあつて、「廣弘明集」「釋文紀」「全隋文」、「漢魏六朝百三名家集」等に收錄されてゐる。[99] 煬帝も詩文に長じてゐたことは確であるが、勝氣な煬帝は負けることの嫌ひな性質から、獨自の作をより善くする爲に、時に彦琮に加朱を命じ、又時には代作もさせたであらうと思はれないことがないでもない。それは大興國寺に住せしめて後は、王親らもさうであるが、蕭懿諸葛穎等の群賢を遣はし、迭々往つて參問し、名理を對談させたとも言はれてゐる。

又敎住「大興國寺」爾後王「晉王廣」之新詠舊叙恒令和之、

と道宣が特記してゐることは、大に注目に値する、如何に煬帝が未だ潛邸にある間から琮に心服したかが解かる。かく考へて吾々は、煬帝の天台智者に遣れる書牘などを見るとき、思半ばに過ぎるものがあるであらう。

その後開皇十二年、彦琮は、文帝の命によりて京に召され、大興善寺に入りて翻經に携つた、

この間にも、一方文帝の厚遇をうけ、他方煬帝の兄弟、漢王諒・秦王俊等の爲にも、或は內第に安居して「叙問殷篤」であつた。

時に晉王廣(煬帝)皇太子となり、京師の曲池に於いて、第林を營み日嚴寺を造建した、禮を厚うし琮を延請してこれに住せしめた。これに由つて朝貴明哲數〻臨謁を增し、玄旨を披會して屢〻信心を發したと傳へてゐる。

煬帝親政の後、大業二年東都(洛陽)の新裝成り、彥琮も諸の沙門と共に、闕下に詣つて朝賀したそのとき特に召されて深く內禁に入り、故を叙して宵を累ね、或は治體を談述し、或は文頌を呈示した、又或時は別敎を奉じて文疏を撰修したこともある。次いで勅を以て洛陽上林園に翻經館を造營し、遷してこれに處らしめ、「供給事隆倍逾關輔」とあるから充分の支給を稟けてゐたことと言はねばならぬ。

又奉別敎、撰修文疏、……叙故累宵、談述治體、呈示文頌、

とも道宣は書いてゐる。(100)

これを以て彥琮が煬帝に如何に重用されてゐたかが窺はれよう。卽ち幷州初見以來、或は晉陽の大興國寺に、或は長安大興善寺、日嚴寺に、或は洛陽翻經館に、煬帝長安に入れば琮亦長安に、洛陽に奠都すれば琮亦上林園に移り住む、煬帝と彥琮とは影の形に添ふやうであることに注意しなければなるまい。以て兩者の關係の如何に緊密であつたかを知ることが出來る。

以上煬帝と彦琮との關係を見來つた讀者は、恐らく既に氣付かれたことであらう。何故淨土詩――唱導法願往生禮讃偈の一部なる禮讃文――が大業主煬帝の作となりて傳はつたであらうか。

勿論このことに就いては、積極的に直接これを證すべき史料は一つも殘つてゐない、それゆゑ自分はこゝに二つの假說を立てゝ見た。

その一は彦琮が「唱導法」を作つたときに(恐らく開皇末から大業初に出來たと思はれるが)その各首頭にある「南無至心歸命禮云云」と、讃尾に附せる「願共諸衆生云云」の句を省略して讃文の本文だけを「淨土詩」として煬帝に獻呈した、これをうけた煬帝は自分の創作の如く裝つて大に得意とし、人にも示し躬親らも唱和してゐた。それで、專門家の間にあつては、彦琮の作であることは知れてゐたが、普通通り一遍のものには煬帝の作と信じられてゐたのではあるまいか、それで我が學問僧なり、留學生が彼の土にあつて、これをきゝ傳へ書寫船載して「大業主」のものと誤認し、少くとも書寫せるものは全く大業主煬帝のものと信じて、これを傳へた結果、聖武天皇もそのまゝ之を信じてお書きになつたのではあるまいかと思ふ。かくて彦琮傳の文疏を撰修したとか、文頌を呈示したとかいふことも意義があり、王の新詠舊敘は恒にこれに和せしめたなどのことも明瞭に說明がつくやうである。專門家卽ち僧侶の仲間には、如何に煬帝が自分のもののやうに裝つてもこれを認めず、依然として彦琮の作として傳へてゐたことは、善導の引用文が何より雄辯に證據立てゝゐる。かうした經緯のも

のであれば「淨土詩が煬帝の作として支那の文獻に傳はらなかつたと同時に、彥琮の作としても、「廣弘明集」あたりが採錄しなかつた事情もこれで說明がつくやうに思はれる。

次にもう一つの假說は、彥琮の「唱導法」なる「願往生禮讚偈」が、彼の地に於いて、出來ると間もなく、我が學問僧に書寫され、やがて將來されたであらうとの考である。

その書寫の年次に就いては素より的確に言ひ得る材料はないが、恐らく彥琮の未だ在世中であつたであらう。更にもう少し讓步したとしても大業年中(義寧元年大業十三年改元我が推古二十五年、西紀六一七年)を下るまいと思ふ。筆寫者と著者と餘り近い時間にあつては、往々撰號を意識的にも或は無意識的にも省略することがある。それが爲に、寫了の年次のみを附して作者名を書かずにあつたのではなからうか、かくて聖武天皇の御世頃には、その「唱導法」は、何人の撰にかゝるか不明のまゝ傳つてゐた。聖武天皇がこの「淨土詩」をお書拔きになるに當つて、これを學問僧なり又は留學生に御下問になつたと想像し、その時「大業何年何月寫了」とでもあつた關係上「それは大業主のものである」と奉答申上げたので、天皇はこれをお信じになつて、そのまゝ何の疑も挾まずに「隋大業主淨土詩」とお書きになつたのではなからうかとも考へられる。若しかくの如く作者無名で傳はつてゐたことと假定すれば、支那にあつての場合を考へて見るに、善導の引用したころは、彥琮を去る餘り遠くはないから直ぐ彥琮の「願往生禮讚偈」に依ると書いたが、法照の頃になると、誰れの作か分らなくなつてゐた爲に、所依を示さなかつたのではなからうかとも察することが出來る。

聖武天皇のお書拔きになつた底本となつたものが、作者不詳であつたとしての論は前に述べた、若しその底本に既に「大業主淨土詩」となつてゐたとしても、それはやはり彥琮の在世中か、示寂(大業六年)後としても六七年後位の間にかゝれたものと見てよい。それは大業十三年に太上皇と尊謚され、恭帝擁立されて義寧と改元してゐる。煬帝謚號の贈られた以後ならば、勿論それは「隋煬帝淨土詩」と書かるべきであらう。然るに「大業主」とあつて煬帝とないところを以て見れば、煬帝の未だ在位中であつたことを證據立てるものではなからうか。

次にこの「大業主」といふ用法であるが、自分の寡聞なる支那文獻に、かうした用例を見ないことである。即ち年號の下に「主」の字を附して、その皇帝を表示することは、古來見聞したことがない。そこで自分はこの題名はどうしても日本的のものであるやうに思ふ。恐らく我が學問僧の發明にかゝるものであらう、何んとしても日本臭味が濃厚に漂つてゐることは否むことが出來ない。

勿論考へ方によつては、まだ〳〵種々の說も立つであらう。然しその孰れにしても、確乎たる史料の徵すべき何ものもない今日、暫く右二說を學界に提出して、大方の高敎を待つこととする。

次節に於いて、我が國に何時如何にして將來されたのであらうかを述べて、この論を閉ぢ度いと思ふ。

七　結　論

彦琮の「唱導法」が、書寫舶載され、我が國に於いても行はれてゐたであらうとの考は既に述べた、然しその傳來を究めむとするに、これ亦直接に何等證すべき史料がない。それゆゑどうしても、間接に考査を進めねばならぬ、それには我が國に淨土敎所依の諸經論が何時頃傳つたか、又淨土敎信仰の對象たる阿彌陀佛・觀世音菩薩・勢至菩薩等の諸像が、何時頃傳來したか等に就いて一言する要があらう。

佛典の部分的傳來は、既に繼體天皇の頃司馬達等によつて將來されてゐたらしく、欽明天皇の十三年百濟王より獻上、その後推古天皇頃よりの多くの僧尼の來朝、寺院の建立等に見るに、經卷の將來奉戴せられたことは、想像に難くない、聖德太子の頃に法華・維摩・勝曼の諸經のあつたことは、書紀[101]イその他に書き殘されてゐるが、その他の多くは經名等を逸せるが爲に今日からは、確かなる史實と認め難いものすらあると言はれてゐる。

他は暫く措き先づ淨土敎所依の經卷傳來に就いてこれを見よう。正史に明な記載ある最も古きものは何んであらう。舒明天皇の十一年(西紀六三九、唐太宗貞觀十三年)に、豫て隋・唐へ留學中であつた學問僧惠隱が歸朝してゐる。[101]ロ そしてその翌年五月、宮中に大齋會行はれ、請ぜられて御前で「無量壽經」を講じたことが「日本書紀」[102]に見えてゐる。この「無量壽經」は惠隱が歸朝に際して將來したか、既に傳來してをつたかは固より明かでないが、新歸朝者が晴

の御前講演に於いて、日本初めての宮講をするのであるから、自分が留學中彼の地にあつて大に研究した經卷で、而も自分が最も得意とするものであつたものに相違ないと想像されるから、これは惠隱が將來したと見て差支がなからうと思ふ。如何に彼がこの講義が得意であつたかは、次の一事でも分らう。卽ち孝德天皇の白雉三年夏四月十五日から二十日迄、六日間に亙つて再度御前講演を行つたときに、又この「無量壽經」を講じてゐることである。その時は沙門惠資が論議者となり、一千の沙門陪聽を許されたといふのであるから、盛んなものであつたことは想像に難くない。[103] 尤もこれは惠隱自らが選んだか、上(カミ)からの御指定であつたかは、「書紀」の記事からは分らない。が勿論先年の結果が善かつたので、再度御召があつたものと見る方が至當であらう。兎に角淨土敎第一の所依經「無量壽經」がこの時我が國へ傳來した的確な史料であることは事實である。後にも說く如く恐らくそれ以前にも來てはゐたであらうが、何等記錄がない。

「阿彌陀經」に就いては、正倉院文書中に「觀世音經」と共に、聖武天皇神龜四年(西紀七二七)八月四日の條に、これを寫す爲に料紙を渡したことを書いてゐるから、[104] この時には確實に來てゐたことは明かであるが、恐らくこれもそれ以前に傳來してゐたことであらう。といふ譯は「無量壽經」「觀無量壽經」「阿彌陀經」「般舟三昧經」「阿彌陀音聲陀羅尼經」「淨土往生論」等の諸經論は僧祐の「出三藏記」[105]にも、法經の「開皇衆經目錄」[106]にも、彥琮の「仁壽衆經目錄」[107]にも既に著錄されてゐる。而して我が孝德天皇の白雉二年(西紀六五一年、唐高宗永徽二年)冬十二月晦日と、[108] 天武天

皇の白鳳六年(西紀六七八年)唐高宗儀鳳三年)八月十五日とに一切經を讀ましめたと見え、[109]又天武天皇白鳳二年(西紀六七三年)唐高宗咸亨四年)三月には、書生を聚めて、始めて一切經を川原寺に於いて寫し、沙門智藏をして筆寫を督さしめた[110]と明記してあるからである。こゝに「一切經」とあるが、前記三目錄記載の孰れであるかは、固より不明であるが、兎に角これ等のうちその何れであるにしても、この「一切經」の中には、必ず前記の諸經論が收錄されてゐたのであるからである。

次に禮拜の對象となるべき佛像に就いて、これを見るに、欽明天皇の十三年(西紀五五二年)百濟聖明王の獻じた經論と共に齎らされた佛像は、釋迦金銅像一軀であるといふことは、「書紀」にも明記がある。[111] 所が「扶桑略記」はその何に依れるかは示さぬけれども、次の如く傳へてゐる。即ち

一云、同年(欽明十三年壬申)十月、百濟明王獻阿彌陀佛像長一尺五寸、觀音勢至像長一尺、表云、臣聞、萬法之中、佛法最善、世間之道、佛法最上、天皇陛下、亦應修行、故敬捧佛像、經教法師附使貢獻、宜信行。[112]

と。勿論これは嚴正批判を下した上でなければ、いま遽に信憑は出來ないが、かうした記事の存することを紹介しておくにとどめる。然し同書は又、天智天皇七年の條に「崇福寺緣起」を引用して左の如くて記してゐる。

七年戊辰正月十七日、於近江國志賀郡、建崇福寺、(中略)小金堂一基三間、檜皮葺、奉造座阿

彌陀佛一軀、幷脇侍二菩薩像[113]（後略）。

と。これはその依れる所を明記してゐる。

又「書紀」持統天皇六年（西紀六九二年）閏五月の條に、

復上送大唐大使郭務悰、爲御近江大津宮天皇（天智）所造阿彌陀像。

との記事が見える。[114] 淨土所依諸經論も傳來してゐる周圍の狀況からも、これ等の記錄は信を措くことが出來ようと思ふ。況やその三年前、持統天皇の三年（西紀六八九年）唐中宗嗣聖六、武后永昌元年）夏四月に、新羅より（天武）天皇の喪を弔ひ奉り、幷せて學問僧明聰、觀智等を上送し、別に金銅阿彌陀佛像、（金銅）觀世音菩薩像、大勢至菩薩像各一軀、及び綵帛錦綾等を獻ぜる旨を明記してゐるにおいてをやである。[115]

北魏造象の樣式を傳へたものの多い我が法隆寺の佛像が、頗る古調を帶びてゐることは人皆知る所である。その中にいま失はれて傳はらないが、聖德太子及びその母君間人皇后その妃高橋大郎女の本地に象どつて造つたと言はれてゐる、金銅阿彌陀、觀音、勢至の三尊佛のあつたことは、現存再建阿彌陀像後背銘[116]によつて明である。

同寺金堂西の大壁畫は、古來阿彌陀の淨土を描いたものと傳承され、その中央はいふ迄もなく阿彌陀佛で、兩側は觀音、勢至の脇侍菩薩を表はしてゐる。而してこの製作年代に就いては、天智天皇より餘り溯ることなく、元正天皇（和銅）迄下りて差支ないと、學者の說は略ぼ一致してゐる。[117]

更に又金堂内に安置されてゐる橘夫人念持佛も亦阿彌陀三尊佛像であつて、天武・持統間の製作と言はれてゐることは、[118]これ亦周く人の知る所であらう。

飛鳥・白鳳・寧樂の諸朝にかけて、觀音と共に阿彌陀の信仰の盛に行はれてゐたことは、かくれもない事實である。

又天武天皇白鳳十四年(西紀六八五年)の條に、天皇淨土寺に行幸したとあるところを以て[119]見れば、淨土依憑の諸經典も整ひ、その對象とする佛像も出來、その專心念佛の寺もあつたことは、疑ふべき何物もないといふことになる。

更に轉じて來世は必ず「淨土」へ行くといふ思想上の信仰のあとを見るに、その例二三にとどまらない。

推古天皇二十九年(西紀六二一)、唐高祖武德四年)春二月聖德太子の薨じたときである。高麗の僧惠慈が太子の死を悼み、來年の祥月命日には、必ず自分も死んで「淨土」で遇ひ奉らうと言つてゐるし、[120]又山背大兄王が皇極天皇二年(西紀六四三)、唐太宗貞觀十七年)十一月に、蘇我入鹿に害せられたときに、聖德太子の子孫が、斑鳩寺の塔中に入つて誓願したといふ語中に「陰に淨土の蓮に入り」[121]と言つてゐること、又元興寺の智光・賴光の問答が「慶氏往生記」に載つてゐる[122]等のことから察知するに、淨土思想のかなり早くより人心に植付けられてゐたことが證せられる。

かくの如く飛鳥・白鳳・寧樂の朝を通じて、漸次阿彌陀の信仰、觀音・勢至の信仰の高まりて行

つたことは、他の色々の事象からも證することの出來る蔽ふべからざる事實である。

こゝ迄西方極樂淨土信仰の思想が進み、所依諸經論が整ひ、所禮諸佛諸菩薩の像が出來、そしてそれを安置すべき寺もあり、專心念佛を行すべき伽藍も出來てゐたとすれば、當時隋唐にあつて盛んであつた禮讃の儀式なり讃文なりが傳來してゐない筈がない。

「正倉院文書」に「唱禮唄」[123]と屢々見えるものも、恐らくこれ禮讃であらう。彥琮の「唱導法」の前に、曇鸞の「讃阿彌陀佛偈」のあつたことは、既に數述べた、それゆゑこの兩者のうち孰れであるかは、全く明かでない。然し曇鸞の作は、西紀五三一―五四二年(我が繼體二十五年―欽明三年)とする信ずべき理由があり、佛敎が百濟から我が國へ傳來した直後に、曇鸞のそれが傳來したか否かは疑はしい。その當時の支那大陸の事情がそれを許さい。これに反して彥琮の「唱導法」は、支那に於いて曇鸞の後に道綽出でて大に淨土敎の興隆に向ひつゝあるところに著はされたことも前に述べた。そしてその頃支那大陸と我が國との交通は頗る頻繁であつたこと、幾多の遣唐使、留學生、求法の學問僧の往復だけでも夥しいものであつたことは今更言ふに及ぶまい。されば大陸の文物は細大洩らさず、殆ど筒拔けに我が國へ將來されたのであるから、彥琮の「唱導法」卽ち「願往生禮讃偈」が、隋開皇末大業初に出來、それが案外早く我が留學僧の誰かの手によつて書寫され、舶載されたものであらうとの私見も、あながち附會の說でなからうと信ずる。

然らばこれを何人に求むべきであらうか。舒明天皇の十一年歸朝せる惠隱は、その翌年

請ぜられて宮廷に「無量壽經」を講じ、我が國宮講の嚆矢をなしたことは前に說いた。彼は推古天皇十六年(西紀六〇八年、隋煬帝大業四年)九月十一日、卽ち彥琮の寂を示す二年前、小野妹子再度の入隋に、僧旻・高向玄理等八人と共に從つて渡支し[124]、逗ること三十一年の後、舒明天皇十一年九月歸朝し、そのとき「無量壽經」を請來した。彼が彼地で淨土敎を究め、淨土敎の大德にも師事し、その歸朝に當つて「無量壽經」を將來したとすれば、彥琮の生存中に京師(洛陽)に到着してゐる惠隱が、彥琮の盛名もきゝ、著述も見、或は會見もしたかも知れぬ、さすれば彼の著「唱導法」卽ち「願往生禮讚偈」を書寫し請來したからとて、少しの不思議もないと思ふ。かくて自分は彥琮の「願往生禮讚偈」を我が國へ傳へたのは、この惠隱ではなからうかと思ふ、暫く假說を提して博雅の高敎を希ふものである。

かくて我が國に傳つた禮讚偈も、その讚詠の方法等も、初めは儀軌の定むる如く行つてゐたであらうが、時の推移に連れて、又盛んに行はるゝにつれて、各自獨自のやり方を出すやうになり、漸次亂れて來たものと見え、元正天皇養老四年(西紀七二〇年、唐玄宗開元八年)十二月に、次ぎの如き詔が出てゐる。卽ち

十二月詔曰、眞詮佛乘化在音聞、唱禮轉經元有規矩、比來僧尼或出私曲、妄作別調、後世之輩慣習成俗、若不變正、恐壞聲敎、自今當式唐沙門道榮及沙門勝曉轉唱、餘皆停之。[125]

とある。これによつて見るに、唱禮の法もと規矩あつたものが、或は私曲を出し、妄りに別調

を作るによつて、今にして變正せずんば、聲教恐くは壞えるだらうと云つてゐる。而してその正しい方法には、新來朝の唐僧道榮及び新歸朝の學問僧勝曉に式るべしといふのである。兎に角在來のものと、新來のものとは格段の相違あつたものと見え、變正すべき必要を奏上し、その結果詔勅となつたものであらうから、法式も曲調も異つてゐたことが分る。自分の考ではこの新來朝者道榮、新歸朝者勝曉の齎らせる新法式こそ當時唐都長安に大流行を極めた、善導の「往生禮讃」であつたであらうと思ふ。「往生禮讃」の傳來に就いては從來聖武天皇天平七年(唐玄宗開元二十三年西紀七三五年)四月僧玄昉の齎せる一切經[126]中に收錄せれてゐたであらうと言はれてゐる智昇の「集諸經禮懺儀」を以て最初としてゐる。

以上で彥琮の「願往生禮讃偈」卽ち「唱導法」が我が國へ傳來されたのは、善導の「往生禮讃」の傳來以前遙であることを證し得たと思ふ。而して善導の「往生禮讃」も、從來我が國の佛教史家が考へてゐるよりは、より以前に傳來してゐたことも明かになつたと信ずる。

彥琮の「唱導法」の支那に於いての存在は、唐の代宗大曆の初、法照が見てゐる所迄迹づけることが出來るのみで、もとより今日に於いては佚書であつて、その全內容に至つては、遺憾ながら全然知るよしがなく、唯僅に法照、善導によつて引用された逸文をとゞめてゐるに過ぎなかつた。然るに我が聖武天皇宸翰中に、「淨土詩」としてその禮讃文だけでも完全に、然も法照、善導によつて變改されざる舊態のまゝ、又彼等の引用せざりし殘部をも、少しの缺損もなく善く千幾百年の星霜を經て、儼存してゐたことは、正倉院御物の史的存在の價値を、いやが

上に增した次第である。

この宸翰雜集に不思議にも殘れる「淨土詩」は、後の我が國淨土敎の重要なる儀軌の一となれる「往生禮讃」の藍本となつたものと、同一のものであることを斷定し得ることは、啻に日支文化交涉史上より見て、興味ある一事象であるのみならず、又我が國淨土敎史上にも、一のセンセイションを喚起する底の、好箇の史料たるを失はないと信ずる。

なほこの「淨土詩」卽ち彥琮の「願往生禮讃偈」の詩としての形式上の研究[127]、內容に立ち入つての覈究[128]、例へば淨土の狀景を表現するに、三經一論のうちより如何なる章句を如何に採取したか等なすべきことが澤山殘されてゐるが、それ等に就いては、又別に稿を改めて述べることとし、いまは一切これを省くこととする。

註

1 帝室博物館發行「正倉院御物棚別目錄」四四頁。

2 帝室博物館藏版「東大寺獻物帳」明治十三年出版、木版本。

3 大正十年十月の發行に係る、該寫製は僅に百二十部の嚴重な限印版であつた爲に、餘り廣く世に頒布されなかつたもので、今日となつては、なか〳〵稀覯なもので、容易に入手出來ないものである。希くば學界の爲に再版の企圖を進められたい。

4 內藤博士「聖武天皇宸翰雜集」支那學　第二卷第三號五三―五八頁。大正十年十一月號。

隋大業主淨土詩

法藏因孫遠撫樂果還深異孫恭作地衆寶閣
爲林花開布有色波揚實相音何當蒙授手一
遂往生心
濁世難還入淨土願逾深金繩直界道珠網縈
柔林見皆真色聞音悉法音莫謂西方遠唯須
十念心
道場一樹迴德水八池深法〻分渠酒屢〻別
行林真珠變鳥色妙法滿風音自怜非上品徒
羨薰誠心
世間叢淨國剎起至誠因觀日心物空想水念
逾真林宣上品法蓮合下生人寄言同志友徒
余流客鑾
自豪山作轉寶手印恒分地水俱爲鏡香花同
作雲葉深誠易注因淡實難聞盛望除疑惑翹
然獨不羣
放光周遠剎分化滿遥空花臺三品異人天一
類同尋樹流香水吹樂起清風在茲心若淨誰
見有西東
迴向漸爲功西路精然通寶幢兼序塊天香入
遠風開花重布水霞細細分空顏生何意切只
爲樂無窮
十劫道先成叢界引羣情金砂徹水照玉葉滿
枝明鳥本珠中出人唯花上生教諸西方聖早
晚定相迎
淨刹本難儔無數化城樓四面無鈴帛六反散
花間擲貪香氣勃水帶法聲流未審聞者事誰
復辨春秋
欲選當生處西方取可歸閻摩聞道布
仙衣香飯隨心至寶殿逐身飛有因皆可入只
自往人稀
未知何處國不是法王家偏求有緣地莫待早
無那八功如意水七寶自然花於彼心能繫當
必往非賒
淨土無衰變一立古今然光臺百寶合音樂八
風宣池多說法鳥空滿散花天已生淨不退隨
意晚開蓮
已成窮理聖真有遍空處在西時現小供是暫
隨祇葉珠珊映佛沙水共澄瞻欲待無生早彼
主必須依
心帶真慈蓋光含法界圓遍生花分映列樹蓋
重懸聞香迎是食見色本爲禪生即無然想能
去非自然
千輪明迎下反道現光中非引恒無絶人歸只
未窮以宣偈在定心神更飛通閻名皆顯注日
發變花叢
慧力徹然上身光被有移動徐諸寶閣偕坐一
金蓮鳥聲非實鳥天顏定真天須知求妙樂會
是未香全
遠壽如來董遥音大土觀無緣能攝物有想定
非難花隨本心變宮移身自安怖閻出世鏡須
共入禪看
恒明四海色商貯一瓶光蓮開人獨處波生法
自揚珠環和日月風樹合宮商僮如今所願何
誅待真常
光筍教耽含空立引車捷天來香蓋捧人去實
衣賣六時閻鳥合四寸踐花任相看無不亟堂
復有長迷
勢至威光遠觀音悲意濃大小全相類左右共
成雙花飛日〻雨珠懸處〻幢自嘯深有鄰所
念未能從
即手從矣異分身隨類同心至慈光及人盛寶
池光見樹成三惡閻波浮互通若解真叢淨應
觀主無空
欲與三昧道止觀一經開心中緣相入寧棄見
花來天樂非因數法服不須裁莫言恒彼住有
力念當迴
普爲加三福成今滅五燒發心功已達繫念罪
使銷鳥化孩光轉風好樂聲調俱衍行道易寧
怨聖果遥
座花非一像映地分千光鐘聲閻常習寶樹鏡
池方無災由處靜不退爲明良問彼前生輩趣
斯勢劫長
聖取明門入天衣葉地居自覺無通易即驗受
身慶枝繁文異繁光體一尋餘但能逾火界也
淨在金樂
樹非生死葉池無愛見波火來念滅水想成亟
觀多蓮中胎化觀音內苦空和互門能早遠三
界豈還過
珠色仍爲水金光即是臺以時花自散隨類葉
還閻遊池更出沒飛空手徒來真心如向彼有
善併須迴
六根常合道三業永絶名念須遊方遍還時待
恩成地平無礙廣法共走慶淨寄言有心輩共
出一危城
洗心甘露水恢眼妙花雲同生彼易識者壽量
難分樂多無發道聲遠不妨閻如何苦瓦滿安
然火自焚
臺裏天人見光中侍者看懸空四寶閻旋迴七
重欄疑多遊地久德少上生難且莫論餘年西
望已心安
天親迴向龍樹往生年樂次無爲後心趣有漏
前共沿花光雖隔殿細吹連欲叙症叢事妙樂
豈能宣
一主安恒麻萬德壽偏存聊與四句善即數十
方尊嚴霑慧海滴漸信向城田迴與衆生共先
使出重昏

5 內藤博士「研幾小錄、一名支那學叢考」二二三頁—二三二頁。

6 今日現存してゐる他の天平寫經及び正倉院文書等と全く同じ字劃である。一二その著しい例を示せば、隋は隋、戒は戒、網は網、願は願、綬は綬、低は低、災は災、眞は眞等はその著しいものであるが、全體の字劃が今日のそれと相違してゐることは注意すべきである。詳細は篇末の寫眞によつて諒知されたい。

7 「隋願往生十方淨土經」には、その名の示す如く十方十佛の淨土を擧げて往生を說いてゐる。東方香林刹、東南方金林刹、南方樂林刹、西南方寶林刹、西方華林刹、西北方金剛刹、北方道林刹、東北方青蓮刹、下方水精刹、上方欲林刹これである。縮藏、成帙六。卍字藏第九套、九冊。

8 魏徵「隋書」卷二、帝紀、高祖の條。

開皇廿年十二月辛巳、詔曰、佛法深妙、道敎虛融、咸降大慈濟度群品、凡在含識皆蒙覆護、所以雕鑄靈相圖寫眞形、率土瞻仰申誠、敬其五嶽四鎭、節宣雲雨、江河淮海浸潤區域、並生養萬物、利益兆人、故建廟立祀、以時恭敬、敢有毀偷盜佛及天尊像嶽鎭海瀆神形者、以不道論、沙門壞佛像、道士壞天尊者、以惡逆論。

宋志磐「佛祖統記」卷第三十九、法運通塞志第十七之六。「開皇二十年、立晉王爲皇太子、勅天下名藩、有毀佛天尊像者、以大逆不道論。縮藏、致帙、史傳部、八—九冊。大正藏經、第四十九卷、史傳部一(二)、三六一頁上段、續藏、第二編、乙、第五套、二、三、四冊。

9 法琳「辯正論」卷第三、卍字藏、第參拾套、拾冊、第五、四八九葉表、裏。

少康、文諗共著「往生西方淨土瑞應傳」に隋朝皇后第三十一として載つてゐる。自註36參照。

10 志磐「佛祖統記」卷第二十八、淨土立敎志第十二之三、大正藏經第四十九卷、史傳部一、(二)二八六頁上段。

11 法琳「辯正論」同上。

12 梅鼎祚纂輯梅膺祚參訂「釋文紀」卷四十一に最も多く收錄されてゐる。

13 文學博士望月信亨著「天台觀經疏の眞僞を論ず」大正三年十一月發行、「淨土敎之研究」四三

四―四五四頁。

同氏「天台十疑論は僞作たる可し」同上、四五四―四六二頁。この二つの論文に於いて望月博士は委曲をつくし、多くの確證を擧げて、その天台智者の眞撰にあらざることを論じて斷案を下してゐる。詳細を知られ度い方はついて見られ度い。

14 魏徵「隋書」卷五十七、列傳二十二、薛道衡傳。煬帝は衡に作詩に於いて負けたのを怨として遂に衡を殺さしたことは有名なことである。

15 法照の詳傳を知られたい方は、宋贊寧の「宋高僧傳」第二十一、縮藏、史傳部致帙五。卍字藏、第三十套九冊、第四。宋戒珠の「叙淨土往生傳」卷下、大正藏、第五十一卷史傳部三(一)、一二一頁中段。續藏、第二編、乙、第八套第一冊、宋志磐「佛祖統記」卷第二十六、縮藏、史傳部致帙八。大正藏、第四十九卷史傳部一(二)、二六三頁下段、その他を見られたい。

同、二六〇頁下段、淨土立教志、第十二之一、蓮社七祖の下に「四祖長安五會法師云云」と見える。

16 「淨土五會念佛略法事儀讚一卷并序、南岳沙門法照於上都章敬寺淨土院述」と書起し、數葉の後にこの割註が出てゐる。續藏、第一輯、第二編、乙、第一套第一冊、四十一葉裏下段。大正藏、第四十七卷、諸宗部四(二)、四七六頁上段。

17 宋王溥「唐會要」卷四十八、六葉表より裏へ。

18 劉昫「舊唐書」卷五十二、列傳第二、后妃下。

19 宋宋敏求撰「長安志」卷第十、これは前の「會要」より更に詳しく「代宗實錄」等を引用してゐる所から見れば、信憑すべき價値充分あらうと思はれる、さすれば章敬寺建立を大曆元年とせるにも何か根據のあつたことと信ずる。

「代宗實錄」曰、是莊連城對郭、林沼盞榭、形勝第一、朝恩初以得之、及是進寺窮極壯嚴以爲城市材木不足充費、乃奏、壞曲江亭館、華清宮、觀風樓及百司行廨并將相沒官宅、給其用焉、土木之役僅逾萬億」とある。

熟るに王溥の「唐會要」は更にもう一つの章敬寺を記してゐる。即ち「貞觀二年正月十九日、勅章敬

寺是先朝創造、從今已後、每至先朝忌日、常令設齋行香仍永爲恒式」といふ。これによれば、前掲章敬皇后の追福の爲の寺以外に、同名の寺のあつたことが知られる。他寺にも同名のもの澤山ある例があるから、これもその類ではなからうか。同書四十九葉裏、雜錄之部。

20 四十八といふ數は淨土敎にあつては、一の聖數である。卽ち彌陀の本願四十八に關係してゐるのである。「大阿彌陀經」卷上、第六、四十八願分の條參照。大正藏、第十二卷、寶積部下、涅槃部全(一)、三二八頁下段より。及び「無量壽經」卷上、國土選擇の條參看。大正藏、同上、二六七頁、中段より。

21 宋戒珠「叙淨土往生傳」卷下、大正藏、第五十一卷、史傳部。續藏、第二編、乙、第八套、第一冊。志磐「佛祖統記」も略ぼ同じ。

22 この三十九題の讃文も決して法照自身の作ばかりではない。或はこれを諸經の偈に求め、或はこれを先輩諸師の作から集記してゐる點は善導・智昇と全く同一方法である。例へば第一「寶鳥讃」の如き「阿彌陀經」に依つてゐるが、最初の十六句は全く善導の「法事讃寶鳥段」の文そのまゝである。第九「般舟三昧讃」の如き「般舟三昧經」に依つてゐるが、又慈愍の「般舟讃」を引用してゐる。詳しくは佐々木月樵氏著「支那淨土敎史」三三八―三四一頁を見られたらよい。

23 善導の著作と言はるゝ五部九卷とは、「觀經疏」四卷、「法事讃」二卷、「觀念法門」一卷、「往生禮讃」一卷、「般舟讃」一卷をいふ。これ等は各別に完稱はあるが、長いから一々あげずに普通用ゐる略稱を以てした。

24 善導傳記の研究は今日未だ完全なるものではない、從つて諸說紛々として歸する所を知らぬ有樣である。その抑〻混雜の基は宋敏中耶王古撰「新修往生傳」に初まる。その中卷に三十三人の淨土往生傳を載せ、その第二十五、第二十六と一は善導、二は善道として二傳を收め、志磐の「統記」は無批判に、これに準じたに起因する。これによつて、今日迄幾多の學者が、なやまされてゐるが、未だ決定的のものはないやうである。望月博士「善導大師の事蹟」、淨土敎研究、五一三―五二五頁、佐々木月樵「善導の淨土敎」、「支那淨土敎史」一八九―二〇四頁、境野黃洋「支那佛敎史綱」二一一―二一

二頁等に、かなり詳述されてゐるが遺憾ながら疑問は依然として解けてゐない。これに就いて自分にも私見があるが、後の機會に讓ることとする。

25 「往生禮讃」は縮藏、懺悔部、調帙十、十一頁表―二十二頁裏。續藏第一輯、第二編乙、第一套第一冊、二十一―三十一葉表。大正藏、第四十七卷、諸宗部四(二)、四三八頁中段より四四八頁上段迄。同卷中別に智昇「集諸經禮懺儀」上下二卷をも收めてゐる。四五六頁中段より四七四頁下段迄。卍字藏、第三十套第八冊等に收められてゐる。

26 西都千福寺大德懷感撰「釋淨土群疑論」卷第四、第三問如何にして西方極樂世界に生をうけるかとの問に對しての「釋曰……故善導禪師勸諸四衆專修西方淨土業者、四修靡懈、三業無雜、餘一切諸願諸行、唯願唯行、西方一行、雜修之者、萬不一生、專修之人千無一失云云」とある。續藏、第一輯第二編第十二套第三冊、二七六葉裏。大正藏、第四十七卷、諸宗部四(一)、五〇頁下段。

27 宋贊寧撰「宋高僧傳」第二十五、讀誦篇第八之二。唐睦州烏龍山淨土道場少康傳の中に「貞元初至于洛京白馬寺、殿見物放光、遂探取爲何經法、乃善導行西方化導文也、云云」と見えてゐる。卍字藏、第三十套、九冊、第四、三九五葉表、上段。大正藏、第五十卷、史傳部、二(四)八六七頁。宋戒珠の「淨土往生傳」續藏、第二編、乙、第八套、第一冊。明袾宏「往生集」續藏、第二編、乙、第八套、第一冊等は皆これに倣つてゐる。

28 宋晉山沙門遵式の「往生西方略序」によれば、「善導和尙立五會教勸人念佛、造觀經疏一卷、二十四讃、六時禮文各一卷」とある。五會を立てゝ念佛を教へしは、法照であるからこゝに多少の混雜はあるとしても、善導の「六時禮文卽ち「往生禮讃」一卷を作つたことは明かである。宋四明石芝沙門宗曉編次「樂邦文類」卷第二、大正藏、第四十七卷、諸宗部四(一)、一六八頁中段。

29 大唐西崇福寺沙門智昇撰「集諸經禮懺儀」上下二卷、自註25參看。

30 同智昇撰「開元釋教錄」二十卷。縮藏、目錄部、結帙四―五。卍字藏、第二十九套、二冊より四冊迄。

31 大唐西明寺翻經臨壇沙門圓照撰「大唐貞元續開元釋教錄」三卷、縮藏、目錄部、結帙。卍字藏、第二

十九套、第四冊。

32 王昶撰「金石萃編」卷八十六、唐四六、三葉裏―五葉裏。この碑の拓本を玻璃版にして文學博士常盤大定、工學博士關野貞共著「支那佛教史蹟」第一集、圖版第四十八、四十九に收めてある。同解說八四六頁に簡單ながらこのことに言及んでゐる。

33 善導傳には「京師光明寺」に住せることを記すのみで、光明寺の所在に就いては全く分らない、然るにこの碑文に於いて明かとなつた。なほその上これを旁證するものは、道宣の「續高僧傳」が、善導の傳を「唐終南豹林谷沙門釋會通傳」中に付傳としてゐる點である。自註35看照。

34 孟銑撰「釋淨土群疑論序」註26參看、續藏、二五四葉下段。大正藏、第四十七卷　三〇頁下段。

35 大唐西明寺沙門釋道宣撰「續高僧傳」卷第二十七。前にも一寸述べた如く、道宣は善導傳を獨立して立てゝゐない。これは善導と道宣とは同時代に存在してゐたし、「續高僧傳」の成つたのはその序によれば、唐太宗貞觀十九年(西紀六四五)であるから、善導は三十三歲の活動盛りであつた譯である。その「唐終南豹林谷沙門釋會通傳」中に出てゐる善導傳は、簡單ではあるが、記事は多くの善導傳中、最も古く又最も信憑に値すべきものと言はれてゐる。同じ終南山に住してゐたから會通傳中に出したものと思はれる。

36 「瑞應刪傳」の完稱は「往生四方淨土瑞應刪傳」である。その著者に就いては、古來少康、文諗の共著と傳へてゐたが、又一說には唐道詵の撰とも云はれてゐる。近時研究の結果は作者不詳とする方が正しいらしい。それゆゑ續藏は道詵撰とせるも、大正藏は全く撰者を除いて載せてゐる。善導傳はその第十二番目にある。續藏、第一冊、第二編、乙、史傳部第八套第一冊十二葉―十三葉。大正藏、第五十一卷史傳部三(一)　一〇五頁中下段。續藏、第二編、乙、第八套、第一冊。その議論も未だ決定したのではないから、自分はいま暫く從來の說に倣つておく。

37 宋福飛山沙門戒珠叙「淨土往生傳」卷中、大正藏、第五十一卷、史傳部、三(一)、一一九頁上段。續藏、第二編、乙、第八套、第一冊。

38 北宋王古撰「新修淨土往生傳」三卷、この書は前註戒珠の「淨土往生傳」を重修增補したもので、神宗の元豐七年を以て成る。今續藏、第二編、乙、第八套、一冊所載は、纔にその下卷のみである。然るに幸にも早く我が國に傳はり、源空の「類聚淨土五祖傳」、並に良忠の「觀經疏傳通記」第一等に引用されて殘つてゐる。その中卷第二十五の善導傳は戒珠の叙述するところと一致するも、第二十六の善道傳は稍〻これと相違してゐるところより同傳の紛糾を來したのであることは既に前に述べた。自註24參照。「佛祖統記」も「類聚淨土五祖傳」も兩者を並學して兩者を別傳としてゐる。

39 宋國學進士王日休撰「龍舒廣淨土文」卷第五、感應事跡、九、大正藏、第四十七卷、諸宗部四(二)、二六六頁下段。

40 宋咸淳四明東湖沙門志磐撰「佛祖統記」卷第二六、淨土立教志第十二之一、二祖光明法師善導傳には唐太宗正觀中とのみあること他と全く同じ、只貞を正と書いてゐるだけの相違であるが、卷第三十九、法運通塞志第十七之六には、太宗正觀十五年の條に載せてゐる。

41 少康、文諗共著「瑞應刪傳」大正藏、第五十一卷、史傳部三(一)、一〇五頁中段。自註36參照。

42 道宣撰「續高僧傳」卷第二十五、感通上、大正藏、第五十卷、史傳部二(三)六五四—五頁。

43 志磐「佛祖統記」卷第三十九、法運通塞志。自註40參照。

44 王日休撰「龍舒增廣淨土文」卷第四、五、「唐京師僧善導傳。二六六頁下段。

45 劉宋、元嘉年中天竺畺良耶舍譯「佛說觀無量壽經」一卷、縮藏、方等部、地帙、一二。大正藏、第十二卷、寶積部一、涅槃部全(一)、三四〇下段—三四六中段。

佛告韋提希、汝及衆生、應當專心繫念一處、想於西方云何作想、凡作想者、一切衆生、自非生盲有目之徒、皆見日沒、當起想念、正坐西向、諦觀於日、令心堅住、專想不移、見日欲沒、狀如懸鼓、既見日已、閉目開目、皆令明了、是爲日想、名曰初觀。

46 一晝夜を六時に分つことは、「阿彌陀經」に既に「是諸衆鳥、晝夜六時、出和雅音云云」と見え、龍樹の「十住毘婆沙論」卷六にも、「大智度論」卷第五十五にも出てゐる。支那にあつても道安・慧遠・曇鸞等

皆この六時に禮拜することを行つた。近くは、隋知通傳に「常誦二弟賢讃佛偈三十首一、毎二六時一對像引聲高唱、委曲凄切、聞者悲之、大業七年、與二門人頂蓋一同聲念佛云云」志磐「佛祖統記」卷第二十七。往生高僧傳。大正藏、第四十九卷、史傳部一(二)、二七三頁下段。

又同じく「佛祖統記」に、「隋開皇三年、海陵沙惠盈、六時禮二三千佛一」とあつて、當時盛に行はれてゐたことを知るに難くない。「統記」卷第三十九、法運通塞志第十七之六。大正藏、第四十九、史傳部一(二)三五九頁下段。

47 曇鸞法師作「讃阿彌陀佛偈」一卷、大正藏、第四七卷、諸宗部四(二)、四二〇頁下段—四二四中段。

48 「讃阿彌陀佛偈」が羅什の作とされてゐることは、「讃歎阿彌陀佛偈一卷、姚秦鳩摩羅什」と京兆了蓮寺文雄輯錄、緣山南溪徹定增補「蓮門類聚經籍錄」卷上、支那傍讃類の條二七頁に見えてゐることでも分かる。大日本佛教全書、佛教書籍目錄第一所收。

49 三十二といふ數は佛の色身に具足せる標相を表はすに用ひ、三十二大人相などといふ、長阿含經卷一、中阿含經卷十一、方廣大莊嚴經卷三、その他枚擧に遑がない。「無量壽經」卷上に、佛阿難に告げ法藏比丘の質問に對へ、四十八願を說いた條に、「設二我得一レ佛、國中人天、不二悉成一滿三十二大人相者、不取正覺」と見えてゐる。

50 その他三十二應觀世音菩薩が衆生を敎化せんが爲に諸種の機類に應用して示現する三十二種の身相をいふのである。(首楞嚴經卷六、法華經第七普門品にては三十三身とせるも殆ど大差がない)その他三十二器、三十二事、三十二陀羅尼、如來三十二業、衆生三十二不善業、夜摩天三十二地、いつた風に(大集經卷二、三、六十三等)三十二玉女、三十二如意珠、三十二萬歲(法苑珠林卷四十九)といつた風に一々例をあげるに困る位である。「三十二相」と題せる佛の妙相を讃揚した頌偈がある烏瑟膩沙無見相以下四十句であるが、意識的か無意識的かは分らないが、自然これらに影響されて三十二首となつたのではなからうか。

大唐西明寺沙門釋道宣撰「續高僧傳」卷第二、譯經篇二。縮藏、致帙、史傳部二、九十三葉表—九十

六葉表。大正藏、第五十卷、史傳部、二(三)。四三六頁中段—四三九頁下段。

51 彦琮は陳武帝永定元年(西紀五五七)に生れ、隋煬帝の大業六年七月(西紀六一〇)に死んでゐるし、道宣は贊寧の「宋高僧傳」第十四によれば、隋文帝開皇十六年四月(西紀五六九)に生れ、唐高宗乾封二年十月に寂してゐるから、兩者の生存年代を比較すれば一目瞭然である。

52 大唐西明寺沙門釋道宣撰「續高僧傳」卷第二、譯經篇二釋彦琮傳、大正藏、第五十卷、史傳部二(三)、四三六頁中段。卍字藏、第參拾套、拾册、第一、十葉表下段十二葉裏下段迄。縮藏、致帙二、九十三葉表、九十六葉表。

53 同上、四三六頁中段—四三九頁下段參照。

54 同上。

55イ 道宣撰「大唐內典錄」第五、隋朝傳譯佛經錄第十七、縮藏、目錄部、結帙二、七十八、八十二、八十三葉表及び同書第十、百十五葉表。

「大唐內典錄」は麟德元年甲子歲京師西明寺釋氏撰と匿名で書いてゐる。然るにその第十に「〇皇朝終南山沙門釋道宣撰傳錄等合一百餘卷」と書し「〇大唐內典錄一部十卷」と收錄してゐるから道宣の撰に間違ひはない。

55ロ 道世編「法苑珠林」卷第一百、傳記篇第一百、卍字藏、第二十八套第十册、六百四十三葉裏。

56 劉昫「舊唐書」經籍志卷下。

57 宋歐陽修譔「唐書藝文志」卷三、十葉裏十一葉表。

58 同上、十一葉裏。

59 道宣撰「廣弘明集」卷第二十五、二十六の間　縮藏、護教部、鼻帙六、七十五葉表。

60 道宣撰「續高僧傳、釋彦琮傳」大正藏、前揭四三八頁上段。

61 「廣弘明集」には、その卷第四に「通極論」、卷第二十五に「福田論」を收めてゐる。

梅鼎祚纂輯、梅膺祚參訂「釋文紀」卷第四十一には福田、通極、辯正の三論及び「法純叙贊」とを採つて載

せてゐる。

嚴可均編「全隋文」巻三十三には、福田、通極、辯正の三論、合部金光明法、純傳贄、沙門不應拜俗總論(これに就いて後に詳説する)等を收錄してゐる。

62 彦琮の書いた笈多傳は、いま亡びて傳はらない、而し少くともそれを參考として書いたであらうと思はれる道宣の笈多傳は「續高僧傳」に收めてある。大正藏、同上、四三四頁下段。

63 これも彦琮の筆になつたものは今日傳はらない、前と同樣道宣の「續高僧傳」には、隋西京大興善寺北天竺沙門那連耶舍傳として收めてある。その中に沙門彦琮これが本傳を作ると見えてゐる。同上、四三三頁中段。

64 釋彦琮傳、同上、四三七頁下段。

65 道宣撰「集神州三寶感通錄」巻第上に次の如く見えてゐる。

今去永安坊張侯橋七八里、余本住京師曲池日嚴寺、寺即隋煬帝所造、昔在晉審作鎮淮海、京寺有塔未安舍利、發長干寺塔下、取之入京、埋於日嚴寺塔下、施銘於上、于時江南大德五十餘人、咸言京師塔下舍利非育王者、育王者乃長干本寺而不測其是非也、至武德七年日嚴寺廢、僧徒散配、房宇官收、雖舍利塔無人守護、寺壞屬官須移徙、余師徒十人配住崇義寺、乃發掘塔下、得舍利三枚、白色光明大如黍米。

これに依つて見れば道宣が日嚴寺に住してゐたとき、偶〻武德七年に同寺が廢されたのであるからこの記錄は充分信を措くべきものである。卍字藏、第二十九套、第二冊一〇六葉上下。

道世の「法苑珠林」は全くこの記事を引用したものである。「法苑珠林」巻第三八。卍字藏、第二十八套、第六冊、二七二葉下。

66 大唐濟法寺沙門釋法琳撰「破邪論」巻上、卍字藏、第參拾套、第五冊、四百六十一葉裏。

67 劉昫「舊唐書」巻七十九、列傳第二十九、傅奕傳、これには「武德七年奕上疏請除去釋教云云」とあつて年次が法琳の記載と合はない。而し法琳の「破邪論」はこの傅奕の上奏に對抗して書いた議論で

あり、「開元釋教錄」卷八も「法琳傳」卷一も「廣弘明集」卷七も共に四年說であるから、これは「舊唐書」の方に何等かの誤りがあるのではあるまいか。當時の根本史料が四年說である以上、志磐の「統記」卷三九、や念常の「通載」卷一二が八年說を主張しても何等有力なものではなく、寧ろ誤りの上に更に誤りを重ねてゐる形であると言はればならぬ。

68 1から18迄は「大唐內典錄」第五、隋朝傳譯佛經錄、第十七、縮藏、結帙、二、目錄部、七十八葉裏、八十葉表。卍字藏、第二十九套、第一冊。

69 智昇撰、「開元釋教錄」卷第七、總括群經錄上之七、縮藏、結帙、四、六十五葉表。

70 「大唐內典錄」第五、同上、八十葉表裏。

71 前揭釋彥琮傳、同上、四三七頁上段。

72 これは漢文を梵語に反譯したものである。卽ち彼の傳中に「有二王舍城沙門、遠來謁レ帝…將レ還二本國一、請二舍利瑞圖經及國家祥瑞錄一、勅又令二琮譯一、隋爲レ梵、合成二十卷一、云云」とあるに依つて知られる。

73 魏徵「隋書」卷三、煬帝紀、大業元年の條に、「夏四月癸亥、大將軍劉方擊二林邑一破レ之」とある。卽ち恐らくはこのときのことであらう。

74 智昇撰「開元釋教錄」第七、總括群經錄上之七　縮藏、目錄部、結帙、四、六十五葉表。

75 同上、同頁。

76 釋靜泰撰「大唐東京大敬愛寺一切經論目錄」縮藏、目錄部、結帙二、一—三十五葉裏。

77 この「大唐慈恩寺三藏法師傳」一部十卷は、その初、慈恩寺、西明寺、太原寺等に歷住した翻經沙門慧立の執筆にかゝる、未だ傳の完成せざるに圓寂して了つたので彥悰續てこれを成したのである。それゆゑ、初めは題して「沙門慧立本、釋彥悰箋」となつてゐる。唐中宗嗣聖五年(西紀六八八、武后垂拱四年)三月十五日に完成した。いま入藏して卍字藏、第三十套、第三冊に納めてゐる。唐の彥悰を隋の彥琮と對比するには、彥悰自身の略傳をも本文に於いて述ぶべきであるが、これは隋の彥琮の如く詳傳がない、贊寧の「宋高僧傳」に僅かに記されてゐるだけであつて、その鄉貫すら明か

ぬたといふこと、「大唐京師寺錄」十卷、「集沙門不應拜俗等事」六卷、大慈恩寺三藏法師傳」十卷、「護てない。唯、貞觀の末京に入り玄奘の弟子となり、弘福寺に住し、文辭の妙味は時流にぬきんでて法沙門法琳別傳」三卷等の著述のあつたことだけは他に明記されてゐるものがある。

78 中野達慧氏編「續藏目錄」下ノ下　五六頁、唐護法沙門法琳別傳三卷、唐彥琮撰とせるは明に悰と改むべく、卍字藏、乙、第二十三編。佐木月樵氏著「支那淨土敎史」三四〇頁に「八段全寫「悰」讃文」とあるは、琮と改むべきである。明治、大正、昭和の間に出版された我が國の各藏經が如何に混雜してゐるかは自註89を參看されたら一層明かとならう。

79 道宣撰「大唐內典錄」第五、縮藏、目錄部、結帙二、八十五葉裏。なほ同一頁にすら混同してゐる。「而謂陰帝里名寺勝塔、獨亡述紀、悰、慣斯事云云」とある。

80イ 同上、第十、縮藏、同百十五葉裏。

80ロ 道世「法苑珠林」卷第一百、傳記篇第一百、卍字藏、第二十八套第十冊、六百四十四葉表裏。

81 智昇撰「開元釋敎錄」第八、縮藏、目錄部、結帙四、七十六葉表。

82 智昇撰「開元釋敎錄略出」第四、縮藏、目錄部、結帙、卍字藏、第二十九套第一冊。

83 劉昫「舊唐書」卷第四、高宗本紀、龍朔二年の條。

84 道宣撰「續高僧傳」卷第二十四、護法下、唐終南山智炬寺釋明瞻傳。大正藏、第五十卷、史傳部二(三)、六三二頁下段。

85 自註95參照。

86 念常撰「佛祖歷代通載」卷第十、大正藏、第四十九卷、史傳部一、(三)、五六二頁上段。

87 志磐撰「佛祖統記」卷第三十九、法運通塞志、第十七之六。大正藏、第四十九卷、史傳部、一(二)、三六一頁下段。

88 道宣撰「廣弘明集」卷第二十五、縮藏、護敎部、露帙六、六十五葉表—七十五葉表。卍字藏、第二十八套第二冊—三冊。

89 文學博士前田慧雲監修の卍字藏經などに至つては甚だしいものがある。「沙門不應拜俗總論」を彥悰の作としてその「集沙門不應拜俗等事」卷六末尾に付せるは大に我が意を得てゐるが、その卷頭「故事篇第一下に於いて「洛濱翻經館沙門釋彥悰。福田論一首並序」となし、明に琮とすべきもの迄を悰としてゐるのは、全く兩者の區別を辨ぜぬものとせればならぬ。卍字藏、第二十八套、第一冊、九十葉裏、六十八葉。

又大正藏、第五十二卷、史傳部四(三)に「廣弘明集」第二十五卷末尾に琮。の作としてゐながら一方、同五十二卷、史傳部四(三)「集沙門不應拜俗等事」卷六末尾に悰。の著としてゐる、即ち全然同一文を一は琮の作とし他はこれを悰の著として掲げてゐる。縮藏、護教部、露帙七、九十七表―裏、悰。とし同、露帙六七十、四葉裏には琮。としてゐる。大正藏は續藏に誤られて、目錄にも本文にも共に「唐護法沙門法琳別傳三卷唐京弘福寺沙門彥琮。撰」としてゐるのは不見識と言はればならぬ。大正藏、第五十卷、史傳部二(一)一九八頁の中段二一三頁中段迄。これ等によつて如何に昔から混雜してゐるかを知られたことであらう。

90 天親造、北魏菩提流支譯「無量壽經優婆提舍願生偈」二卷、これは最も普通には天親の「往生論」或は「淨土往生論」で通つてゐる。所謂淨土門諸流の崇ぶ「三經一論」中の一論である。その內容は「無量壽經」の要義を論じたものである。曇鸞にこの註二卷がある。即ち「往生論注」といふ喧しいものがそれである。こゝに採つたのは、開卷第一の「無量壽修多羅章句我以偈總說竟」の中から拔萃抽記したものである。縮藏、十一、印度大乘諸論釋部、暑帙。卍字藏二十二套第一冊。

91 龍樹造「十二禮」禪那崛多三藏別譯、龍樹菩薩「讚禮阿彌陀佛文」。これは善導の引用からは分からないが、唐弘法寺迦才の撰にかゝる「淨土論」の中にも引用されてゐるので、右のやうに分る。然しこれは嚴正な批判をしたら果して龍樹のものか否は多少の疑問がないでもないが、いまは論ぜずにおかう。卍字藏、第一輯第二套、第二冊、印度撰述部。

大正藏、第四十七卷、諸宗部四(一)九六頁下段迦才「淨土論」卷中所引。龍樹「十住毘婆婆論」易行品に

は念佛易行を說いてゐるが讃文は見えない。縮藏、暑帙、八。

92 曹魏天竺三藏、康僧鎧譯、佛說無量壽經、二卷世に大經と稱す、淨土三部經の一、縮藏、方等部、地帙。卍字藏、第六套、第三冊、大正藏、第十二卷寶積部下、涅槃部全(一) 二六五下段—二七二頁中段。

93 同上。佛說無量壽經。

94 宋、元嘉中、畺良耶舍譯、佛說觀無量壽經、世にこれを小經といふ、淨土三部經の一、縮藏、方等部、地帙。卍字藏、第十套、第四冊、大正藏、第十二卷、寶積部下涅槃部全(一) 三四〇下段—三四六中段。

95 道宣撰「續高僧傳」卷第三十に「雜科聲德篇」なる一篇を設け誦經・梵唄又はこの唱導に名ある人々の事蹟を述べてゐる。贊寧の「宋高僧傳」卷第三十もこれに倣ふ。我が國の師錬「元亨釋書」卷二十九にも亦「音藝志」に唱導の一科を置き、我が國の唱導の由來を叙してゐる。「宋高僧傳」は卍字藏第三十套、第五冊、四百十八葉、表、下段。

96 道宣撰「廣弘明集」卷第十五、三、佛德篇。大正藏、第五十二卷、史傳部四(二)、二〇八頁。

97 自註91に揭ぐる龍樹の「十二禮」は唯讃文だけであるが、これとて初めからかくありしか否は疑問である、といふのは迦才の引用によるのみであるから、その原形迄かうであつたかどうかは、いま俄に斷ずることは勿論出來ない。

98 開皇から仁壽大業にかけて大興國寺といふ名の寺の各地に創設され、又はかう改名されたものが澤山あつた。法琳の「辯正論」によれば長安建德寺を大興國寺と改め、隋州にも同名の寺を建てたと見えてゐる。道宣は「續高僧傳」第十八に、并州大興國寺、第十九に、同州大興國寺のあつたことを記し、道世も亦「法苑珠林」に於いて、隋文帝仁壽元年六月には涇州、襄州に大興國寺のあつたことを載せてゐる。然しこゝにいふのは、并州(晉陽太原)にあつたもので、もと齊の興國寺をさしたものらしい。それは永樂大典所引の「大原志」に次の如き記事がある。

「大興國寺、本齊興國寺、隋世增大之、寺門外有晉王廟碑、第二佛殿有煬帝及蕭后塑容、後簷有李伯藥大業十年碑」。煬帝が彥琮を請じて住せしめたのはこの寺であらう。寺內に煬帝や蕭皇后の塑像

が祀つてあつたり、大業十年碑があつたりするところより見ても煬帝に密接な關係のあつたことが想像されるからである。

99 隋煬帝集に就いては內藤博士も書かれてゐるやうに諸記錄その傳を異にしてゐる。或は五十五卷といひ、或は五十卷、三十卷、二十八卷といつてゐる。今日吾々の見得る張溥の「漢魏六朝百三名家集」は卷を分けてゐないが、內容は一番豐富である。卽ち、その第九十七册目に煬帝集を載せてゐる。それによれば詔四十、勅四、璽書二、檄一、令二、書四十七、文一、誄一、疏四、樂府十二、詩三十一首を收載してゐる。梅鼎祚の「釋文紀」は卷第三十九に、「隋煬帝遣延釋智顗書」以下二十數種を收め、道宣の「廣弘明集」卷二十二、法義篇に「寶臺經藏願文」、同卷二十七、戒功德篇に「隋煬帝與智者顗禪師書」、「隋煬帝受菩薩大戒文」、同卷二十八敬福篇に「隋煬帝行道度人天下勅」同卷三十統歸篇に「隋煬帝遊方山靈巖寺詩」、「隋煬帝昇樓望春燈詩」を著錄してゐる。現存してゐるものだけでも以上の如くであるから如何に彼も達文能詩であつたかを想像されると思ふ。

100 道宣撰「續高僧傳」釋彥琮傳參照。

101 イ「日本書紀」卷二十二、推古天皇十四年(丙寅)の條。「十四年秋七月、天皇請皇太子、令講勝鬘經。三日說竟之、是歲、皇太子亦講法華經於岡本宮」とある。國史大系本六國史、日本書紀、四五四頁。

101 ロ「日本書紀」卷二十三、舒明天皇の條、「十一年(己亥)、秋九月、大唐學問僧惠隱・惠雲、從新羅送使、入京」と見えてゐる。國史大系本六國史、日本書紀、四八四—五頁。

102 同上「十二年(庚子)五月丁酉朔辛丑、大設齋、因以請惠隱僧、令說无量壽經」とあり。同書、四八五頁。師錄撰「元亨釋書」卷二十。舒明天皇の條。「十二年五月初五日、宮中設齋會、宣惠隱講無量壽經、曷爲書曰宮講、始也、隱師何書姓貴也、曷爲貴始(カ)(ヘル)應宮講也」とあつて、宮講の最初であつたことを力說してゐることに注意しなければならぬ。寬永元甲子年春三月日、版本二十六葉裏。

103 「日本書紀」卷二十五、孝德天皇の條。「白雉三年(壬子)夏四月戊子朔壬寅、請沙門惠隱於內裏、使講無量壽經、以沙門惠資、爲論議者、以沙門一千、爲作聽衆、丁未、罷講」。同上、五四〇頁。

師錬撰「元亨釋書」巻二十一、孝德天皇の條にこれをうけて載せてゐる。

104 「正倉院文書」に、神龜四年、寫經料紙帳、觀世音經阿彌陀經合十卷分穀紙百張、八月四日、此經分之表紙、用大槃若分麻紙五張、少書史。大日本古文書、一、三八三頁。

105 釋僧祐撰「出三藏記」、縮藏、目錄部、致帙、一、六葉裏に「無量壽經」二卷、一名無量清淨平等覺經、九葉表に「無量壽經」或云「阿彌陀經」、六葉表「阿彌陀經」二卷、五葉裏に「般舟三昧經」を收錄してゐる。

106 釋法經等撰「開皇衆經目錄」、縮藏、目錄部、致帙、一、九十六葉裏に「無量壽經」二卷、晉永嘉年、竺法護譯、九十四葉裏に「無量壽觀經」一卷、宋元嘉年、沙門畺良耶舍於揚州譯、九十五葉裏「無量壽佛經」一名「阿彌陀經」後秦弘治年羅什譯、九十三葉裏に「般舟三昧經」三卷、晉世、竺法護譯と載せてゐる。

107 釋彥琮撰「仁壽衆經目錄」、自分が四節に於いて述べた如く「仁壽目錄」は、「靜泰目錄」の中に合採してゐるから、この中玄奘三藏の譯を除けば、彥琮の目錄所載のものとなる。縮藏、結帙、二、十三葉表「無量壽經」二卷、晉永嘉年、竺法護譯、九葉表に「無量壽觀經」一卷、宋元嘉年、畺良耶舍於揚州譯、十三葉表に「阿彌陀經」吳黃武支謙譯、二葉裏に「般舟三昧經」三卷、晉世竺法護譯、五葉表に「無量壽經論」一卷、後魏菩提留支譯とあるは、天親の「優婆提舍」即ち「淨土往生論」である。その他「觀佛三昧經」、(二葉表)「念佛三昧經」(八葉裏)、「阿彌陀鼓音聲陀羅尼經」(四葉表)等の淨土教關係の諸經論が著錄されてゐることも見のがしてはならぬ。

108 「日本書紀」巻二十五、孝德天皇の條。「白雉二年(辛亥)冬十二月晦、於二味經宮一、請二千一百餘僧尼一、使レ讀二一切經一。」と見える。同上、五四〇頁。

「校本扶桑略記」第四、「白雉二年辛亥、十二月遷都、請二千餘僧尼一、讀二一切經一、此夕勅燃二千餘燈一、」とあるから盛んなものであつたことが解る。改定史籍集覽第一冊、通記類第一、五十三頁。

師錬の「元亨釋書」巻二十一にも同樣の記載がある。

109 「日本書紀」巻二十九、天武天皇の條。「白鳳六年(戊寅)八月辛卯朔乙巳、大設二齋於飛鳥寺一、以讀二一切經一、便天皇御二寺南門一而禮二三寶一。」同上、六一一頁。「元亨釋書」巻二十一にも同樣。

110 「日本書紀」卷二十九、天武天皇の條。「白鳳二年〔癸酉〕三月、聚二書生一始寫二一切經於川原寺一。」「元亨釋書」卷二十一、同天皇の條、二年二月二十七、帝卽位、敕二於川原寺一寫二大藏經一、沙門智藏督役故任二僧正一。」同上十一葉裏、「扶桑略記」第五、六十三頁。

「書紀」と「釋書」とは一は三月といひ一は二月といふ、これは「釋書」の方が誤りである。「書紀」に「是月聚二書生云云」とあるを「釋書」はその數行前に三月とあるを見落した結果二月と誤記したものであらう。

111 「日本書紀」卷十九、欽明天皇の條。「十三年〔壬申〕冬十月、百濟聖明王遣二西部姬氏達率怒唎斯致契等獻二釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷一」前掲三九二頁。

112 「扶桑略記」第三、前掲二十八頁。

113 同上、第五、同五十九頁。

114 「日本書紀」卷三十　持統天皇六年〔壬辰〕閏五月の條。前掲六七〇頁。

115 「日本書紀」卷三十、持統天皇の條、三年〔己丑〕夏四月癸未朔壬寅、新羅遣二級飡金道那等一奉レ弔二瀛眞人天皇一、並上二送學問僧明聰、觀智等一別獻二金銅阿彌陀像一〔金銅〕觀世音菩薩像・大勢至菩薩像各一軀、綵帛錦綾。同上六五六頁。

116 現存再建阿彌陀三尊佛の中尊後背鐫銘に、右去承德季中白波入金堂侵佛像盜道具、自然以降一百餘歲寺僧每見須彌座之空殘屢悲嚴像之永隱非曾一寺之含悲爭无四隣之傷意依斯勸進十方施主磨瑩三尊聖容于時寬喜三季辛卯三月八日務前權僧正範圓寺貞永元季壬辰八月五日法印權大僧都覺之時始鑄之寺務之時供養之仰願本師阿彌陀伏乞本願聖靈納受面面懇志不空各各結緣然則斷惡修善之道漸以滿足矣

貞永元年八月　日　　大勸進　僧　觀　俊

大佛師法橋　康　勝

銅工　平　國　文

これによつて見れば、當初阿彌陀三尊佛があつたのが、承德中盜難に罹つて本體を存せない須彌

座が空しく殘されて、主なき有樣を見るに忍びず、前權僧正範圓が鑄鑄にかゝり、寛喜三年に出來上つたのが卽ちこの像だといふのである。若しこれに僞りがないとすれば、推古時代に阿彌陀三尊佛の傳來してゐたことを示してゐると思ふ。考古學會發刊「造像銘記」一七一頁。東京美術學校編輯「法隆寺大鏡」第四十六集、同解說一頁。

117 この四個の大壁には卽ち四佛淨土を畫いたものであることは周く人の知る所である。顯眞の「古今目錄抄」によれば「西壁阿彌陀淨土、東壁寶生淨刹、北浦戸東壁藥師刹土、同戸西脇釋迦國土」と見え、東・南・北に就いては、議論があつて必ずしも顯眞所記のやうでないが西壁だけは、今日迄阿彌陀の淨土を描いたことについては諸學者の意見一致してゐる。その製作年代については、文學博士瀧精一氏の「法隆寺金堂の壁畫に就て」を見られ度い。「考古學雜誌」第七卷第一號、大正五年九月號、一八頁。

118 顯眞の「古今目錄抄」によれば「次西戸方有厨子、黑漆須彌座、光明皇后之母橘大夫人所造也、內在彌陀三尊云云」とある。その製作年代に就いて、從來諸說行はれてゐたやうであるが、近頃では、その內容佛は一方推古時代の形式を殘存し、一方早くも天平時代の樣式を馴致せんとする段階を示してゐるものとの說が學者間の定說である。詳細は、工學博士關野貞氏「橘夫人厨子及其內容佛に就て」「國華」一六四號一五六—一六二頁を見られたい。

119 「日本書紀」卷二十九、天武天皇十四年(乙酉)の條。同上六三九頁。

120 「日本書紀」卷二十二、推古天皇二十九(辛巳)の條。「春二月己丑朔癸巳、半夜廐戸豐聰耳皇子命薨于斑鳩宮、(中略當是時、高麗僧惠慈、聞上宮皇太子薨、以大悲之、(中略この間太子の德を讚歎し)今太子既薨之、我雖異國、心在斷金、某獨生之、有何益哉、我以來年二月五日必死、因以遇上宮太子於淨土、以共化衆生、(後略その通り死せる旨を記せり)同上、四六四—五頁。

121 「扶桑略記」第四、同上四十九頁。

122 同上、第四、五十四—五頁。智光夢に淨土の相を見て、覺めて後、その淨土相を畫工に命じて圖せ

しめた。これ即ち智光曼荼羅の緣起を物語つたものである。

123 「正倉院文書」年月不詳のものとして、「觀世音經」と並んで「唱禮」と見え、（大日本古文書二、三一六―七頁、）天正十四年十一月十五日の次にあり、又同三一四頁には「唱禮唄」とある。面白いのは「師主元興寺僧平攝」と書せる前に「唱禮一具」「淨行六年」と並書してあることである。元興寺は智光の住せる所、支那三論宗を傳へてゐるが、この三論に伴つて我が國へ淨土敎の傳來したことは種々の點から言へるがいまはこれを略す。

124 「日本書紀」卷二十二、推古天皇十六年（戊辰）、九月辛未朔辛巳、唐客裴世清罷歸、則復以小野妹子臣爲大使、吉士雄成爲小使、福利爲通事、副于唐客而遣之、（中略）是時遣於唐國學生、倭漢直福因、奈羅譯語惠明、高向漢人玄理、新八大國、學問僧新漢人日文（旻）、南淵漢人請安、志賀漢人惠隱、新漢人廣齊等、并八人也。同上　四五七頁。

125 師錬撰「元亨釋書」卷二十二。これは又次ぎの「續日本紀」卷第八、元正天皇養老四年十二月己卯朔、癸卯の條に、「詔曰、釋典之道、敎在甚深、轉經唱禮、先傳恒規、理合遵承、不順神改、比者或僧尼自出方法、妄作別音、遂使後生之輩、積習成俗、不肯變正、恐汙法門、從是始乎、宜依漢沙門道榮、學問僧勝曉等、轉經唱禮、餘音並停止之。」とあるものを換骨脫胎したものであることは明かである。國史大系本、第二卷、百二十五―六頁。

126 同上　「元亨釋書」卷十六、及び卷二十二、「扶桑略記」卷六、同上九十頁。僧玄昉が將來せる經論五千餘卷は、智昇の「開元釋敎錄」所載のものであることは既に定說である。「正倉院文書」寫經司啓の所に「合依開元目錄應寫一切經伍仟肆拾捌卷」天平十一年二月十三日云云とある。大日本古文書二、一五七―八頁。

127 詩形の上から見て、五言絕句が未だ完成の域に達せない前のものであり、法照・善導等によつて修訂されてゐる句は、嘗に調子の上から許りでなく、韻字その他から見て、五言の完全なる成立を告

げてからのものであることを示すものであると言つたやうな外形上の考察もやらればならぬことの一つである。

なほ法照・善導等によつて採取されなかつた部分、即ち宸翰にのみ殘された部分の考究などへも這入つて行かればならぬし、又取殘されたに就いての理由なども究めて見なければならない。例へば概して句調の惡いもの、固有名詞(天親とか、龍樹とか)のある句、又阿彌陀以外の菩薩、即ち觀音とか勢至とかの名のあるもの、多少でも理窟張つてゐるものなどが法照・善導等によつて省略されてゐること等は、興味あることと思ふ。

淨土詩の31の第一句に、宸翰に於いて一字缺けてゐる。もとの字が如何なるものであつたかは、今日では勿論分からぬ、テキストの條で示したやうに(篇末玻璃版參照)、その第二句の「龍樹往生年」とある對句であるから、自分は「天親廻向[日]」と入れて見たのであるが、平仄の關係からいつても差支ないであらうと思ふ。かうした方面から見た「淨土詩」の研究は、まだ〳〵大に進めればならぬがいまは一切省略することとした。

追記　前に彥琮の著述を記した所に左の一書を加へる。「大隋西國傳」十卷といふ。この書も勿論今は佚して傳らない。隋唐志共に著錄してゐない。「續高僧傳」第二、達摩笈多傳中に「彥琮內外通照華梵並聞、預三參傳譯、偏承二提誘、以下笈多遊履具歷二名邦一陳述事迹前傳、因著二大隋西國傳一部凡十篇、本傳一、方物二、時候三、居處四、國政五、學教六、禮儀七、飲食八、服章九、寶貨十、列二山河國邑人物一云云」とある。これ恐らくは笈多より聞ける事實に基づいて彥琮の著述したもので、前述の「西域傳」「天竺記」と共に、現存してゐたら西域史研究に寄與するところ多かつたらうと思ふ。

附記　本稿を草するに當つて淨土教の教旨、儀軌等に就いて學友藤本了泰、同僚石黑彌致兩君に負ふ所尠くない、記して以て感謝の意を表する。

〔昭和三、八、三一〕